

# 平城宮東院地区の調査

— 第584次・第587次・第593次

## 1 はじめに

調査地は、特別史跡平城宮跡の東の張り出し部南半、東西約250m、南北約350mの範囲である東院地区に位置する(図193)。「続日本紀」などの文献から、東院地区には皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られている。また、神護景雲元年(767)に完成した「東院玉殿」や、宝亀4年(773)に完成した光仁天皇の「楊梅宮」は、この地にあったと考えられている。

東院地区では、これまで南半や西辺を中心に発掘調査が進められてきた。前者では庭園遺構(東院庭園)の存在が、後者では大規模な掘立柱建物群が頻繁に建て替えられていた様子がわかっている。2006年度以降は、東院地区の利用状況を解明するために、西辺を中心に発掘調査を進めてきた。

今回の調査では、東院地区の中核建物群が位置していたと推定される中核部から西北辺にかけての遺構の様相をあきらかにし、東院地区全体の空間利用の変遷を解明することを目的として、第584次調査区および第593次調査区を設定した。第584次調査区の調査対象面積は1,103㎡(東西29m、南北38mおよび東北隅拡張区東西2m、南北0.5m)であり、新規調査面積は986㎡である。第593次調査区の調査対象面積は969㎡(東西29m、南北33mおよび東拡張区東西1m、南北12m)であり、新規調査面積は882㎡である。

第584次調査区は、2017年2月6日に開始し、2017年5月29日に終了した。第593次調査区は、2017年10月2日に調査を開始、2018年1月31日に終了し、埋め戻さずに東隣の第595次調査(来年度に報告予定)において継続して調査にあたった。

また、個人住宅建設にともなう事前調査のため、第584次調査区の東122mの箇所に第587次調査区を設定した。調査対象面積は60㎡(東西10m、南北6m)である。調査は、2017年4月24日に開始し、4月26日に終了した。

## 2 周辺の調査成果

第584・593次調査区の南に位置する第401・423・503

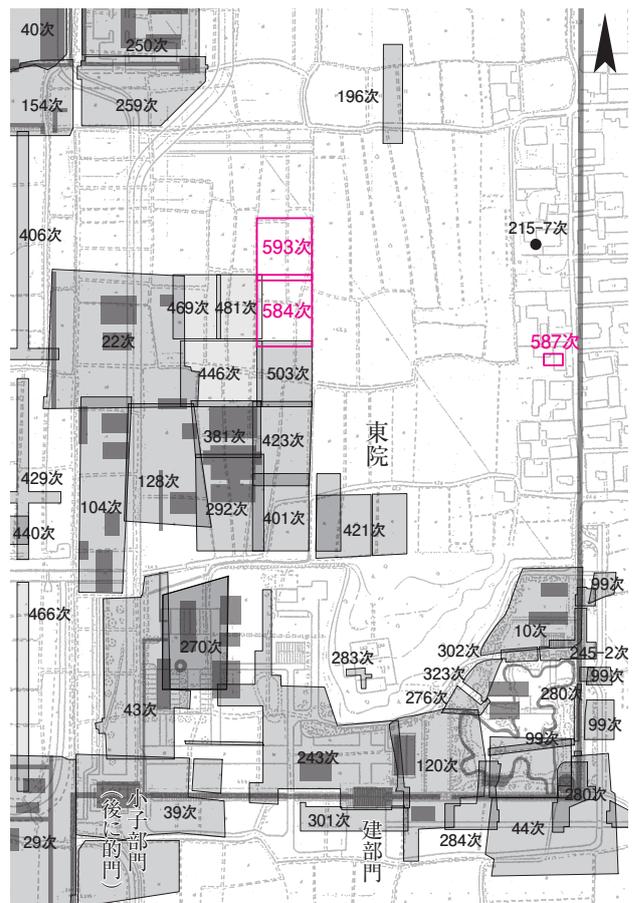


図193 第584・587・593次調査区位置図 1:4000

次調査区では、掘立柱の単廊である回廊SC18936・19600が確認され、その内(東)側には南北棟建物SB19116・18916が、柱筋を揃えて同時期に展開することを確認している。これらについて、東側の東院中核部を区画する同時期(東院6期)の一連の建物群と捉えた<sup>1・2・3)</sup>。こうした区画施設は、これよりも遡る時期でも位置や規模を変えて見つかっていることから、単廊により区画された東院中核部が継続的に利用されていたことが指摘された<sup>4)</sup>。なお、区画施設の東側には、複数時期の東西棟の四面廂建物や北廂建物などが見つかっている。

一方、今回の調査区の西・南西に位置する第292・381・446・469次調査区では、大小規模の総柱建物群や比較的小規模な建物が、頻繁に建て替えられながらも、時期を通じて展開することがわかっている<sup>5・6・7)</sup>。出土土器の種類・量なども鑑みて、東院西辺が東院中核部のバックヤードとして機能していた可能性が示された。また、第481次調査区では、総柱建物が南辺までにとどまり、北部に展開しないことがわかった<sup>8)</sup>。加えて、北部西半では甕類の出土が多く見られたことから、西辺南部とは異なり厨や貯蔵施設の存在が推測された。

なお、第587次調査区が位置する東院地区東辺では、

これまで住宅建設にともなう小規模な事前調査が少数実施されてきた。今回調査区より北方の第215-7次調査区では、奈良時代整地土を検出し、その上面で西廂付南北棟建物と南北塀を検出した<sup>9)</sup>。しかし、調査面積が狭小であったことから、その全貌は定かではない。また、他にも小規模な調査区を複数設けてきたものの、顕著な遺構はなく、東辺の様相は未だあきらかではない。

### 3 第584次調査

#### 基本層序

遺跡の基本層序は、調査区東部で南西から北東に走る田境の東西で堆積状況が大きく異なる。

後世の削平が比較的軽微と思われる田境東側では、表土(10cm)、整備盛土(20cm)、旧耕作土(約30cm)、床土(約15cm)、奈良時代の遺物包含層(5~10cm)と続き、さらに遺構検出面である奈良時代の上層整地土(黄褐色粘質土、5~10cm)、奈良時代の下層整地土(灰褐色粘質土、15~20cm)を確認し、地山(明黄褐色粘土)に至る(図194)。また、調査区東北隅では、上層整地土と下層整地土の間に、暗褐色粘質土からなる中層整地土の堆積が局部的に認められた。

削平の激しい田境西側では、表土(約10cm)、旧耕作土・床土(約30cm)、奈良時代の遺物包含層(5cm)と続き、遺構検出面(灰白色粘土混じり明黄褐色粘土)に至る。

各遺構は、奈良時代の遺物包含層の下、田境東側では上層整地土の上面、田境西側では灰白色粘土混じり明黄褐色粘土層の上面で検出した。遺構検出面は、田境東

側で標高66.8mと高く、削平が進んだ田境西側では標高66.4mと、東側に比べて最大40cm程度低くなっている。

#### 検出遺構

今回の調査で検出した遺構のうち、奈良時代の遺構は、掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条、溝5条、石列1条である(図195)。周辺の調査成果をふまえると、東院の遺構は6期に区分でき、今回の調査区の遺構はこのうち1~5期に区分できる<sup>7)</sup>。なお、今回の調査区では6期の遺構は確認できなかった。以下では、時期別に各遺構について概説し、つづいて現時点では時期の特定が難しい遺構と奈良時代より前の遺構について記述する。

#### 1期の遺構(奈良時代前半)

**南北棟建物SB19515** 桁行10間(約29.6m)、梁行2間(約5.9m)の大型の南北棟建物。柱間寸法は、桁行・梁行ともに約2.9m(10尺)等間である。第481・503次調査区で西側柱と南妻柱は既検出であった。今回の調査区では東側柱列と北妻柱を検出し、全体の規模をあきらかにした。柱穴掘方は、東西1~1.2m、南北1.1~1.4mのやや縦長の方形を呈し、抜取は掘方の中央あるいは北寄りに認められる。なお、SB19515の柱穴の深さはいずれも、遺構検出面から1m前後である(図198-A・B・C)。

**南北棟建物SB19970** SB19515の東約2.7m、調査区のほぼ中央で新たに検出した、身舎が桁行10間(約29.6m)、梁行2間(約5.3m)の大型の南北棟掘立柱建物。東側には出が約3.2m(11尺)の廂が付属する。柱間寸法は、桁行が約2.9m(10尺)等間、梁行が約2.6m(9尺)等間である。南妻柱は南の第503次調査区北辺において既検出

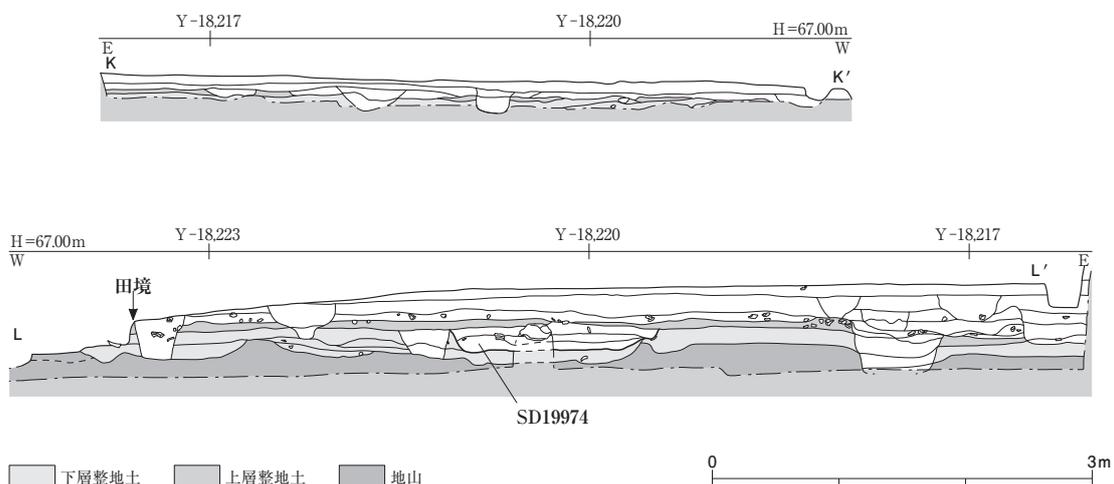


図194 第584次調査区土層図 1:60

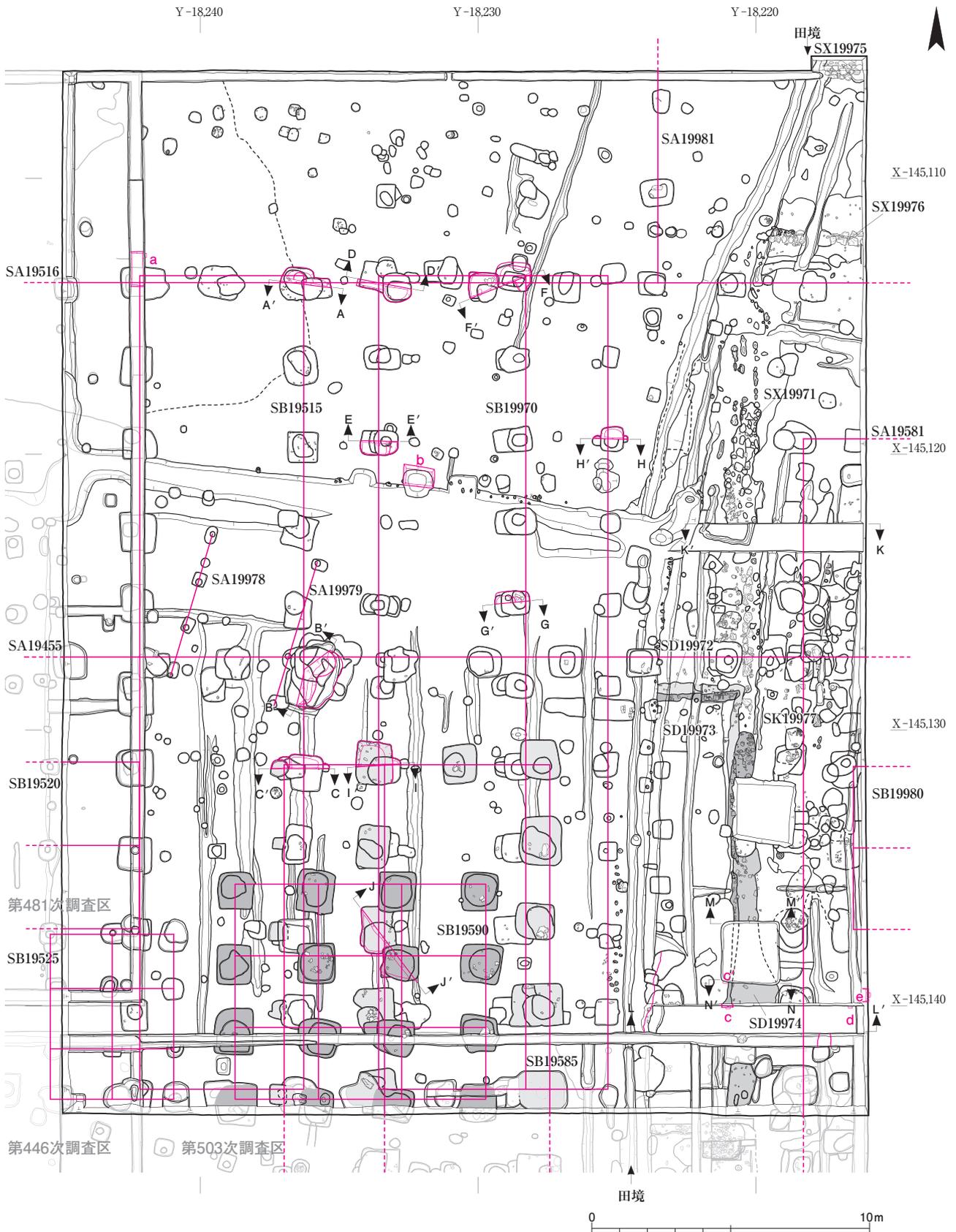


図195 第584次調査区遺構図 1 : 200

であった。西側柱南半は、4期のSB19585西側柱柱穴と重複している。東西の柱筋がSB19515と揃うこと、柱穴が2期のSA19516・SA19455の柱穴と重複し、それに壊されていることから、SB19515とともに1期に属すると考えられる。検出した柱穴全体の平面形は、東西1.2～1.5m、南北0.9～1.0mの長方形あるいは長円形を呈している。柱穴は当初、調査で検出できた柱穴輪郭全体の西側に設けたようであるが、後にこの柱穴の東半を壊して、東側にほぼ同規模の新しい柱穴掘方を掘削し、柱を立て替えたと考えられる。なお、西側柱柱穴は遺構検出面から深さ約30cm程度と浅い一方、東側柱柱穴は深さ約50～60cm、東廂柱穴も深さ約45cmあり、西側柱柱穴よりも深い(図198-D・E・F・G・H)。

**南北石列SX19971** 調査区東側の奈良時代整地土上で検出した、ほぼ南北に延びる石列(図196)。SB19970東廂の約5.0m東に位置する。幅0.5～0.7mで、約13m分を検出した。北半には石は現存せず、その抜取穴を確認した。石は、30～40cm大の安山岩が主に用いられているが、20cm大の凝灰岩も一部に見られる。南半では据付掘方が確認でき、石列本体から東に0.2m、西に1.1m、全体の幅が約2.0mと広い。据付掘方には、1～2cm大の石や土器がやや多く混じる。この据付掘方が2期に属するSA19455の柱穴と重複し、それに掘り込まれていることから、この石列は1期に属すると考えられる。なお、据付掘方の西肩は、残存する石列の南端から約7.0m南に至るまで確認できた。

## 2期の遺構(平城遷都(天平17年、745)頃)

**南北棟総柱建物SB19525** 調査区西南部で検出した桁行3間、梁行2間の掘立柱の南北棟総柱建物。柱間寸法は約2.1m(7尺)等間である。西の第446・481次調査区、南の第503次調査区でも一部を検出しており、今回の調査で規模が確定した。

**東西塀SA19516・SA19455** 西の第446・481次調査区から続き、本調査区東辺までの範囲で、SA19516は16間、SA19455は22間。本調査区では各8間分検出し、さらに東に延びることを確認した。柱間寸法はともに約3.0m(10尺)等間である。なお、SA19516とSA19455の間隔は約13.6m(46尺)を測り、両者の柱筋は揃う。掘方の深さは、遺構検出面から0.9～1.3mである(図198-A・B・D・F)。



図196 南北石列SX19971検出状況(北西から)

## 3期の遺構(天平勝宝年間(749～757)頃)

**溝SD19972** 調査区東部、奈良時代整地土上で検出した、L字状に屈曲する溝(図197)。幅0.2～0.4mで、南北8.9m分、東西3.0m分を検出した。北端は、1期の石列SX19971の石材が抜き取られた後に敷かれた整地土層を掘り込んでおり、北端で西に直角に折れ曲がる。また、調査区東南の東西畦南壁でSD19972が認められないことから、南端でも西に屈曲していたと考えられる。

**溝SD19973** SD19972と重複する、SD19972より新しい溝(図197)。東西部分は幅0.2～0.4mで約2.8m分を、南北部分は幅約0.2mで約9.3m分を検出した。平瓦が凸面を上にして一列に並べられているのが特徴である。元来はSD19972と同じく、石列南端で西に屈曲し、南端でも西に曲がっていたと考えられる。

**南北溝SD19974** SD19973と一部が重複する、SD19973より新しい南北溝(図197)。幅0.7～1.6mで、約13.7m分を検出した。溝内には瓦や土器が多く見られ、とくに南部分で幅が広がる。SD19972・SD19973の南北部分と平行していることから、ほぼ同時期の遺構と考えられる。調査区東南の東西畦南壁ではSD19974のみ確認でき、南の第503次調査区から続くことが判明した(図194下)。

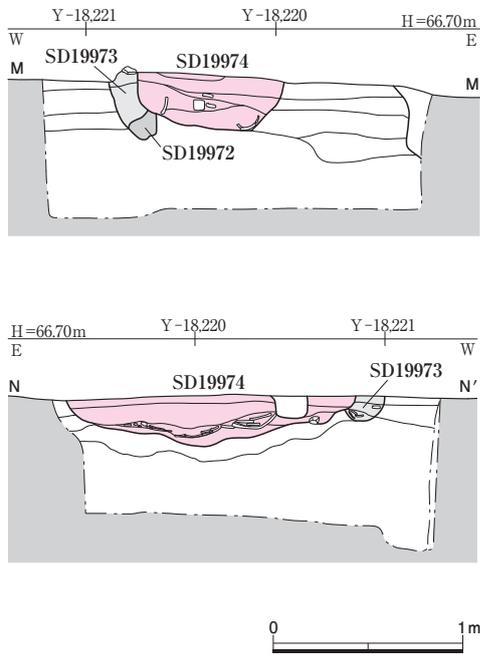


図197 SD19972～19974断面図 1：40

なお、SD19972・19973の南北部分、及び19974は、南の第503次調査区で検出した3期の壇状遺構SX19570と、東辺の位置がほぼ一致する。

#### 4期の遺構（天平宝字年間（757～765）頃）

**南北棟建物SB19585** 調査区南半中央で検出した身舎が桁行9間、梁行2間の南北棟掘立柱建物。西側には廂が付属する。この西廂は、以前の調査では堀SA19583とされていた。柱間寸法は、桁行・梁行とも約3.0m（10尺）等間である。南の第503次調査区から続き、今回新たに北に3間分と北妻部分を検出したことにより全体の規模を確認した。柱穴掘方は長辺1.4～1.7m、短辺1.2～1.5mととりわけ大きく、埋土に5～10cm大の礫が多く混じる。柱穴の深さは、遺構検出面から0.65～0.9mである（図198-I・J）。

**総柱建物SB19520** 調査区西南隅で検出した東西2間、南北2間の掘立柱の総柱建物。柱間寸法は、桁行・梁行とも約3.0m（10尺）等間である。西の第481次調査区で既検出であったが、今回の調査で全体の規模が確定した。

**南北堀SA19581** 調査区東辺で検出した大型の南北掘立柱堀。柱間寸法は約3.0m（10尺）等間である。南の第481次調査区で8間分を検出したが、今回の調査で北に7間分延び、そこから東に折れることが判明した。

#### 5期の遺構（天平神護・神護景雲年間（765～770）頃）

**総柱建物SB19590** 調査区西南部で検出した掘立柱の総柱建物。柱の配置は3間四方であるが、東西方向の柱間寸法が約3.0m（10尺）等間であるのに対して、南北方向が約2.7m（9尺）等間とやや狭いため、建物全体の平面が長方形を呈している。南の第503次調査区で南半を検出しており、今回の調査で全体の規模が確定した。柱穴掘方は、東西1.2～1.4m、南北1.3～1.5mでほぼ正方形を呈する。掘方の深さは、遺構検出面から0.7mである（図198-J）。

#### 時期未確定の遺構

調査区東部の奈良時代整地土が残存している箇所で見出した遺構の中には、時期が特定できないものも含まれている。

**建物SB19980** 調査区東辺南半で、柱穴3基を検出した。西側にこれと組み合う柱穴が認められないため、東側に展開する東西棟掘立柱建物の西妻部分と考えられる。掘方が一辺1.3～1.5mと大きいのが特徴である。

**東西石組溝SX19975** 調査区東北隅付近で検出した東西方向の石組溝。残存長約1.4m、幅約65cm。当初は高さ約15cmの南側石列のみ確認できていたが、北側を東西2m、南北0.5m拡張したところ、2石もしくは1石を配置した底石と北側石の抜取を確認した（図199）。また、南側石列から0.7m南の位置で据付掘方を検出した。据付掘方北辺は調査区外であるため確認できなかった。石材には、安山岩の他、凝灰岩、花崗岩、チャートが用いられている。

SX19975は、今回の調査区の東側に続くと考えられるため、遺構全体の規模は不明である。

**東西石組溝SX19976** 調査区東北隅付近で検出した東西方向の石組溝。残存長約3.3m、幅0.5～0.6m。高さ約10cmの北側石列とその抜取穴を検出したが、南側では側石とその抜取穴はいずれも検出されず、5～10cm大の礫のみ断続的に列をなしている様相であった。また、側石列から1.2m北、0.4m南の位置で、幅約2.2mの据付掘方と思われる掘り込みを検出した。この埋土には直径1～2cm程の石や土器がやや多く含まれる。なお、SX19975とはほぼ東西方向に平行しており、SX19975とSX19976の心心間の距離は約6.0m（20尺）である。石材には、安山岩の他、凝灰岩、花崗岩、チャートが用いられている。

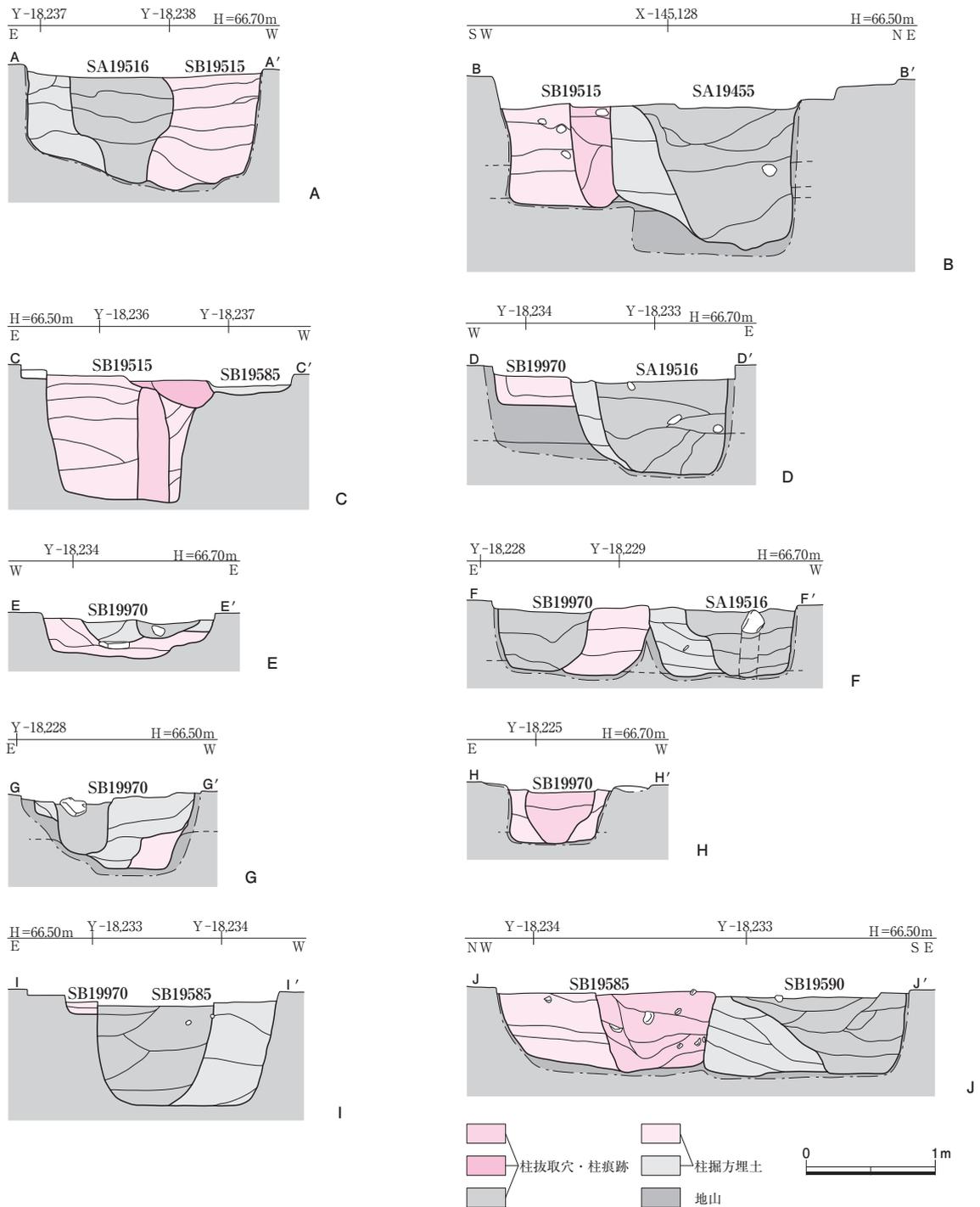


図198 第584次調査区柱穴断面図 1:50

SX19976は、今回の調査区の東側に続くと考えられるため、遺構全体の規模は不明である。

**土坑SK19977** 調査区東部中央のやや南寄りで検出した小土坑。東西0.7m、南北0.8mであり、南北に長い長円形を呈する。4期の塀SA19581の柱穴の北側を一部壊

していることから、4期以降に掘削されたと考えられる。また、上層整地土から掘り込まれていると思われる。なお、SK19977埋土上層からは、杯Aや碗A・Cなどからなる土師器の供膳具が比較的まとまって出土した。断割調査を実施しておらず、また、この土坑と組み合わせ



図199 東西石組溝SX19975検出状況（北東から）

の土坑を確認できていないので、SK19977の時期・性格は不詳である。

#### 奈良時代より前の遺構

**斜行堀SA19978** 調査区西部中央で検出した、北で約16度東に振れる堀。3間分を検出した。柱間は約1.8m（6尺）。同様の斜行堀は第481・503次調査区でも確認できる。

**斜行堀SA19979** 調査区西部中央で検出した、北で約16度東に振れる堀。北から2穴目がSB19515の東側柱柱穴により壊されて認められないが、3間分を検出した。柱間は約1.8m（6尺）。SA19978の東約3.8m（13尺）に柱筋を揃えて平行する。

#### 出土遺物

**土器・土製品** 本調査では、整理用コンテナ26箱分の土器が出土した。その多くは遺物包含層出土の土器であり、遺構に伴うものは少ない。小片がほとんどを占め、口径の大半が復元できたものはごく僅かである。奈良時代の土器がほとんどを占めており、古墳時代の土器および中近世の土器・陶磁器も少なからず混じる。奈良時代の土器は、総じて須恵器が多く、土師器が少ない。また、須恵器・土師器ともに、壺・甕類に比して杯・皿類が卓越する。なお、土師器は遺存状態が悪く、表面が剥離し

極めて脆くなっているものがほとんどであり、器面調整の観察が概して容易ではない。以下では、数少ない遺構出土土器を中心に示す（図200）。

1～5は、奈良時代前半（1期）の遺構から出土した土器である。1・2はSB19970出土土器。1は、東側柱掘方から出土した須恵器皿A。器壁が厚いのが特徴である。底部外面と口縁部外面下半にはロクロケズリ調整が施されている。また、口縁部外面下位には、一条の水平沈線状の凹みが廻る。復元口径28.0cm。2は、東側柱掘方から出土した土師器皿A。口縁部は、やや丸みを帯びた平底の底面から、緩やかに曲線を描いて立ち上がる。外面調整はb0手法と思われる。復元口径21.2cm。3～5はSB19515出土土器。3・4は、東側柱抜取穴から出土した須恵器。3は杯B蓋。頂部外面中心にはつまみが付いていたが根元から欠損している。頂部外面にはロクロケズリ調整が施される。口縁部外面には、重ね焼きによる他の須恵器口縁部の剥離痕がわずかに残る。復元口径16.4cm。4は鉢A。口縁端部はやや外傾した平坦面をなす。外面全体には、水平方向にやや幅の広いヘラミガキが断続的に施される。復元口径25.2cm。5は、東側柱掘方から出土した土師器杯A。口縁部は上位で外反し、口縁端部は内面に巻き込んで丸くおさまる。外面調整はb0手法と思われる。復元口径19.4cm。

6～18は、奈良時代後半（2期以降）の遺構から出土した土器である。6はSA19516柱抜取穴から出土した須恵器皿B。口縁部は短いやや斜め上方にまっすぐ立ち上がる。底部外面外寄りに、やや低い高台が取りつく。復元口径23.4cm。7・8はSB19585柱穴出土土器。7は北妻柱掘方から出土した須恵器杯B蓋。頂部から口縁屈曲部手前にかけて、ロクロケズリ調整が施される。復元口径20.0cm。8は東側柱掘方から出土した土師器皿A。口縁部は、平坦な底部からやや斜め上方に若干内湾気味に伸びた後に外反する。口縁端部は内側に巻き込み丸くおさまる。復元口径20.2cm。9～11はSA19581柱穴から出土した須恵器。9は柱穴掘方から出土した杯B蓋。頂部には、ロクロケズリ調整が施される。復元口径15.4cm。10・11は柱抜取穴から出土した。10は杯A。やや薄手の口縁部は、平底の底部から斜め上方にまっすぐ立ち上がる。口縁端部は内傾する平坦面をなし、外面側斜め上方にわずかに突き出る。復元口径13.8cm。11は杯C。口縁

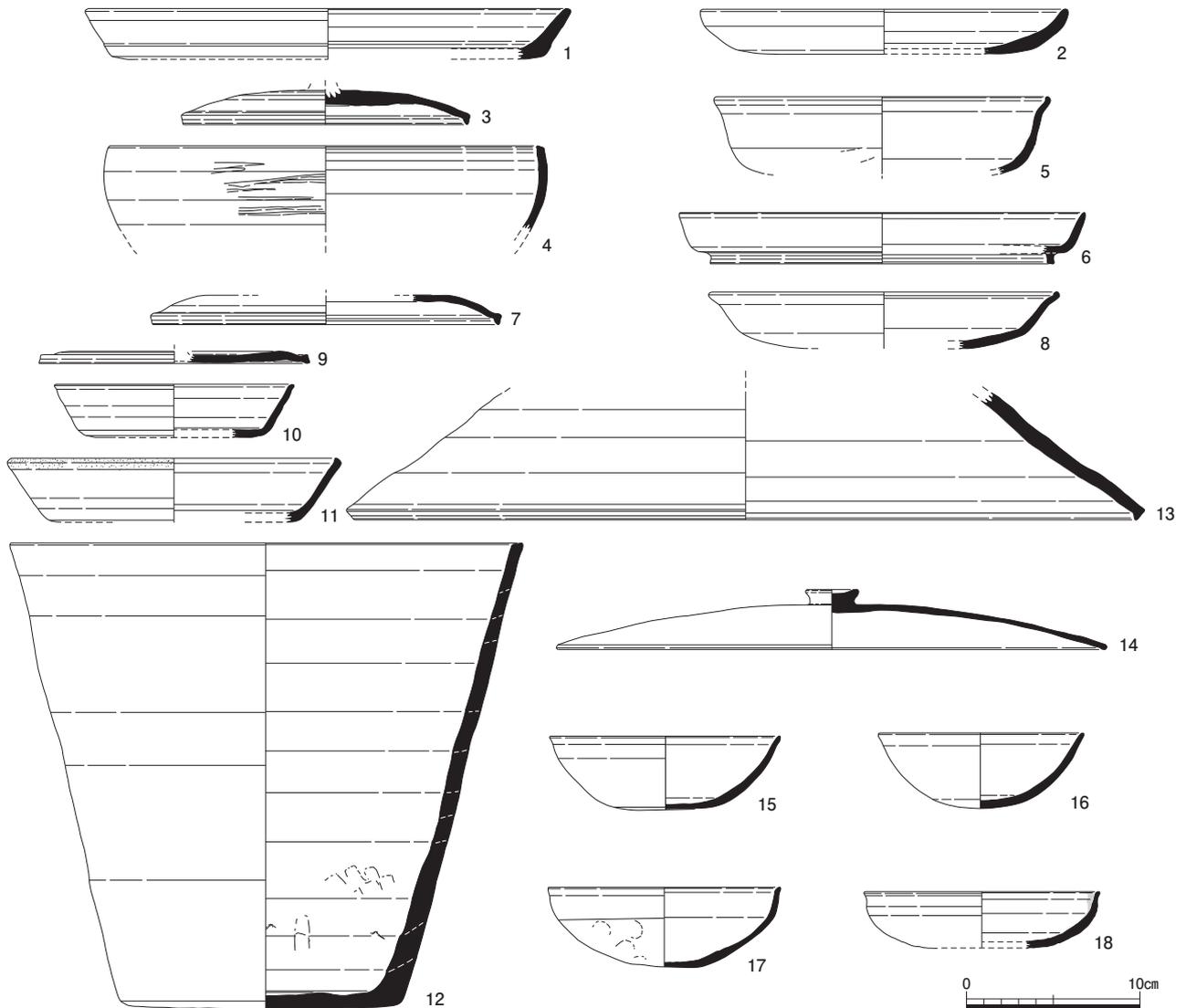


図200 第584次調査出土土器 1 : 4

端部は内側にやや肥厚し、小さく突き出る。復元口径19.2cm。12・13はSB19590柱抜取穴出土土器。12は西側柱抜取穴から出土した須恵器鉢E。口縁端部はやや内傾する平坦面をなす。口縁部上位にはロクロナデ調整が明瞭に残る。復元口径29.6cm。13は東側柱抜取穴から出土した土師器大型蓋。深い笠形を呈すると思われ、なだらかな弧を描きながら斜め下方の口縁に至る。口縁端部は下方やや内側に小さく折り曲げる。復元口径46.0cm。14～17はSK19977から出土した土師器である。14は皿B蓋。口縁端部は内側に巻き込んでやや肥厚し、丸くおさまる。頂部中心には、上部が凹面をなすボタン状のつまみを取りつく。復元口径31.8cm。15・16は椀A。口縁直下はやや強めになでられており、口縁部上端がわずかに外

反する。外面調整はc0手法と思われる。15は口径13.3cm、16は復元口径11.8cm。17は椀C。口縁直下はやや強めになでられており、口縁部上端がわずかに外反する。口縁端部は内傾する面をなす。外面調整はe0手法である。口径13.4cm。

18は、調査区南東の奈良時代上層整地土上面から出土した土師器杯C。口縁端部は内傾する面をなす。外面調整はa0手法と思われる。口縁部上端から内面にかけて、一部で煤痕が残ることから、灯明皿と考えられる。復元口径13.6cm。

上記のほか、圈足円面硯の脚柱部小片1点、皿B蓋を用いた転用硯1点が出土した。いずれも遺物包含層からの出土である。

(山藤正敏)

**瓦磚類** 本調査区で出土した瓦磚類は表32に示した。以下に残存状況のよい資料を図示する(図201)。1は6311Ba(Ⅱ-1期)、2は6282E(Ⅲ-1期)、3は6151A(Ⅳ-2期)、4は6663A(Ⅱ-2期)、5は6760A(Ⅳ-2期)である。出土した軒瓦の時期をみるとⅡ-1期～Ⅳ-2期と幅があり、各型式とも出土数が少なく、主体となる軒瓦の組み合わせや建物と所用軒瓦の関係をあきらかにすることはできない。

本調査区の軒瓦の100㎡あたりの出土比率をみると、軒瓦3.2点となる。総瓦葺きの建物が並ぶ平城宮第一次大極殿院地区が12.0点、第二次大極殿院地区が9.0点、檜

皮葺き建物が多いと想定される内裏地区でも11.9点である<sup>10)</sup>。丸瓦、平瓦の100㎡あたりの出土比率は、本調査区が丸瓦7.1kg、平瓦32.1kgあるのに対し、総瓦葺きである平城宮朝集殿院南門が丸瓦40.2kg、平瓦100.0kg<sup>11)</sup>、第一次大極殿院西楼が丸瓦45.3kg、平瓦161.8kg<sup>12)</sup>である。廃都後の土地利用の違いもあり、一概にはいえないが、以上の数値をみると、本調査区に総瓦葺き建物が存在した可能性は低く、檜皮葺きで葺棟の建物を想定することも難しい状況である。 (今井晃樹)

### 自然科学分析

本調査では検討課題として、東院の基盤となる1)奈良時代の下層整地土およびその下位の地山と認識される堆積層と、2)第584次調査区西北部および第593次調査区西部にみられる砂礫層の堆積環境についての2点が、発掘調査の成果から挙がってきた。いずれも東院地区の造営に関わる問題であると同時に、平城宮造営以前の旧地形が造営にともない、あるいはそれ以前にどのように改変されたのかを解きあかす重要な鍵となる。また地山の改変とその後の地業手法への理解は、平城宮造営プランや土木技術などを実証的に検討するための有意義な知見となるものと考えられる。

課題1とした奈良時代の下層整地土およびその下位の地山は、発掘調査担当者から「虎縞」、「縞々」と呼称され、土色相の変化に合わせて整地土を灰褐色粘質土、地山を明黄褐色粘土として分層している(図194)。露頭観察からこの土色相の変化は、基質となる明黄褐色の砂質泥層～混礫砂質泥層と灰色～灰褐色混シルト砂層との互層において、基質の層厚が厚くなると地山として、薄くなると整地土として判別されていることがわかった。しかし詳細に露頭観察をおこなうと、2つの層はけっして互層ではなく、基質の中を灰色～灰褐色混シルト砂が段違いに貫進している様相がみられ(図202)、一般的な自然堆積構造とは異なる可能性が出てきた。一方、課題2とした砂礫層の堆積は、その堆積環境について度々議論がおこなわれてきた。露頭観察に基づく地質学的な所見からは、砂礫の堆積構造にいくつかのグループがあり、その堆積環境は自然の営力によるものとそれ以外のものに分かれることが見て取れた。しかし2つの異なる営力による堆積層は隣接しており、その区分は複雑な構造を示した。これは旧地形を人が改変する際によく発生する。

表32 第584次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			軒棧瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	点数
6135	A	1	6663	A	1	時代不明	1
6144	A	1		B	1		
6151	A	1		?	1		
6282	E	1	6664	D	1		
6311	Ba	1		F	1	計	1
巴(近世)		1	6721	?	2	その他	
型式不明(奈良)		11	6760	A	1	平瓦(刻印)	1
時代不明		1		B	1	巖斗瓦	1
			型式不明(奈良)		3	用途不明道具瓦	1
			時代不明		2	磚	3
計		18	計		14	計	6
			丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量		70.236kg	317.247kg	10.462kg	0.173kg		0
点数		880	6754	7	3		0

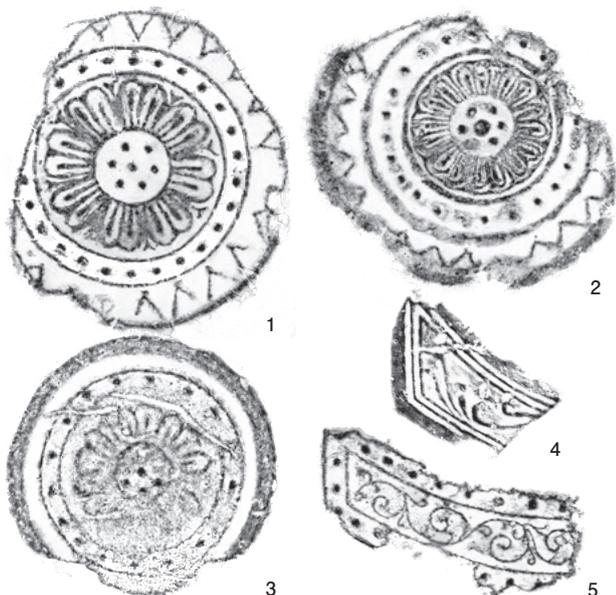


図201 第584次調査出土瓦 1:4

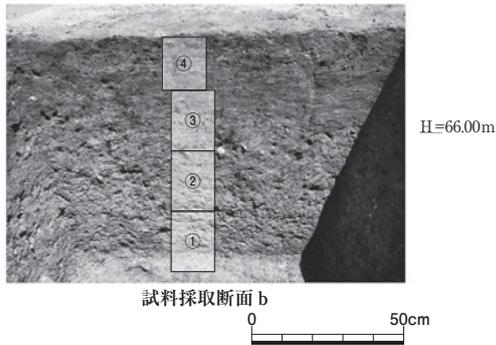
このため系統的に砂礫層を類別化し、その分布や構造を検討することで東院地区の基盤についての理解が深まる可能性が出てきた。

今回は、課題1について新たな知見が得られたため報告する。課題2については引き続き分析をおこない、第593次調査の詳細な検討とあわせ改めて報告をおこなう予定である。

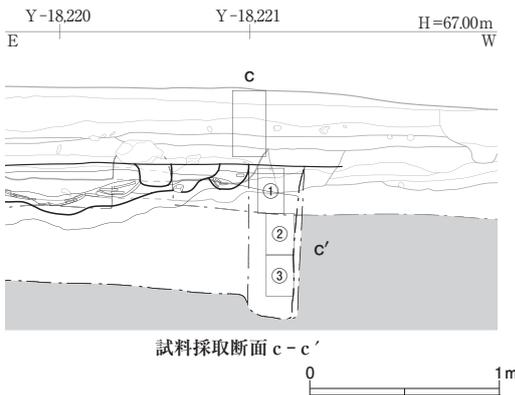
**試料と方法** 試料は、第584次調査の断面 a～e で鉛

表33 採取試料の位置と試料番号一覧

断面番号	壁面	試料番号	断面番号	壁面	試料番号
a-a'	東壁	①	d-d'	東西畦	①
		②			②
		③			③
b-b'	南壁	①	e-e'	東壁	①
		②			②
		③			③
		④			④
c-c'	西壁	①			
		②			
		③			
	南西壁	①			



試料採取断面 b

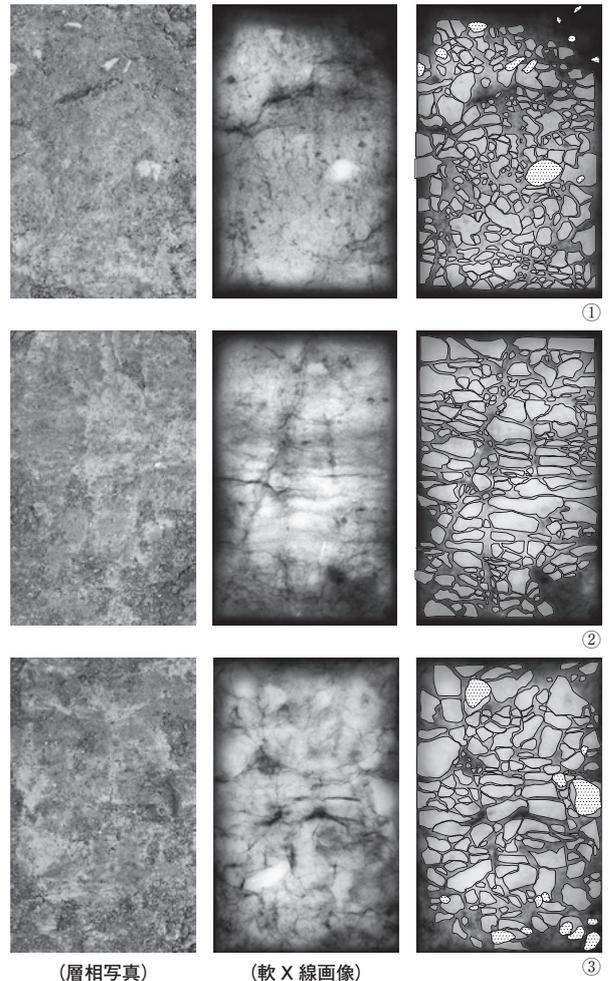


試料採取断面 c-c'

図202 地質切取箇所 (b・c-c')

直方向に採取した地質切取試料を用いる (図195、表33)。本報告では、このうち断面 b と断面 c-c' の堆積構造について検討する。試料の採取にあたっては、露頭において堆積構造を十分に観察したあと、14×22×4 cm のスチロール角型ボックスを用いて堆積層を切り出した。試料は研究所に持ち帰り、層相観察、層相の写真撮影をおこなったあと、フジフィルム社製軟 X 線撮像装置 (μFX-1000) とイメージングプレートを用いて地質構造の撮像をおこなった。イメージングプレートのスキャンにはフジフィルム社製 BAS-5000 を用いた。

**結果** 断面 b と断面 c-c' から採取した地質切取試料の層相観察からは、どちらも基質となる明黄褐色砂質泥層～混礫砂質泥層の中を、灰色～灰褐色混シルト砂が段違いに貫進する。この灰色～灰褐色混シルト砂は、い



(層相写真)

(軟 X 線画像)

凡例： 偽礫・破碎土塊 礫

図203 c-c'断面の地質切取試料の堆積構造

ずれも細かくは羽状構造、ロード構造がみられ、液状化にともなう脱水による砂脈であることがわかる。この液状化は地下水位の比較的高い軟弱地盤において、震度5弱以上の大きな地震動などにより発生することが一般的に知られている。さらにこの砂脈が貫進した基質は、砂脈などにより粉碎された土塊を含め、ほぼ偽礫の集積からなっていることがあきらかとなった。すなわち今回報告をおこなう断面からは、いわゆる自然堆積層は見当たらず、整地土がその築造工程を示すだろう盛土構造ごとに液状化によって浮き上がり、分断化されてきたと考

えられる。以下に、堆積構造として本来の構造をよりとどめている断面c-c'から順に断面ごとに得られた堆積構造の知見についてまとめた。

**断面c-c' (図203)** 一部に礫を挟在するものの、基質はほぼ明黄褐色砂質泥層からなる。軟X線像からは、この基質の薄層が何層も堆積していることがわかる(図203②-③)。さらに試料③下部~中部、試料②中部をみると、灰色~灰褐色混シルト砂は一見、基質との互層を形成しているようにみえる。しかし試料③右側や②中央から左側にかけて砂脈が貫進し、貫進する付近の偽礫は小片に粉碎されていることが観察され、互層構造ではなく段違いな網目状構造を形成していることがわかる。このような構造は、試料全体を観察すると、あらゆるところで発生しており、先ほど示した互層は成立していない。その構造は試料①で顕著である。

これらの結果から、まず地山とした調査区基盤土は、本来上位の奈良時代の下層整地土と一連の堆積物であると考えられる。さらに調査現場での目視観察において互層構造と考えられた構造は、元来は整地構造の一部を成していた可能性もあるが、現状では液状化にともなう砂脈となっていることがわかった。

**断面b (図204)** 断面c-c'に比べ基質に礫を多く含む。この礫の分布は、不明瞭ではあるが全体の傾向として水平的に並ぶように堆積している。しかし級化もしくは逆級化構造、あるいはトラクションカーペット構造はともなわず、どちらかという基質土に混在されているようにみえる。基質は断面c-c'で観察されたものよりも小片化し本来の構造は捉えにくい。試料②上部~試料④中部の偽礫の配列には、基質の薄層が墨重する様相がわずかに認められる。灰色~灰褐色混シルト砂はこの基質をなす偽礫の間を網目状に貫進しており、液状化によって堆積構造が崩壊している様子が認められる。特に最下部となる試料①では、基質がかなり小片化し液状化体に飲み込まれている様相がみられる。

これらの結果、断面c-c'と同様に断面bにおいても、まず地山とした調査区基盤土は、本来上位の奈良時代の下層整地土と一連の堆積物であると考えられる。さらに調査現場での目視観察において互層構造と考えられた構造は、元来は整地構造の一部を成していた可能性もあるが、現状では液状化にともなう砂脈となっていることが

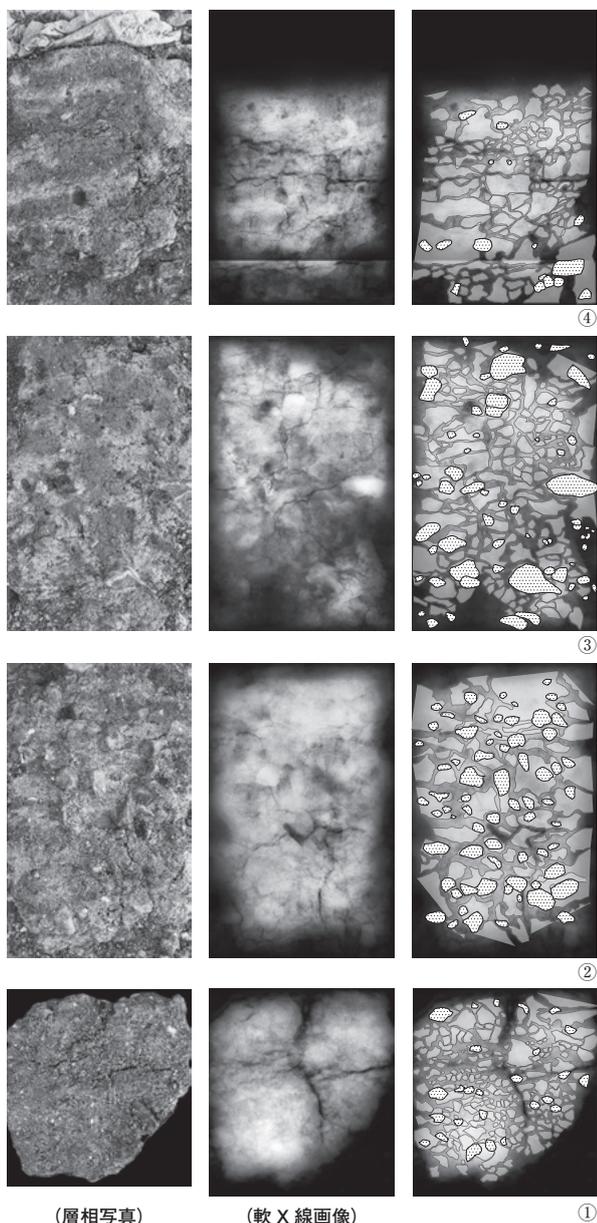


図204 b断面の地質切取試料の堆積構造 (凡例は図203と同じ)

わかった。

**地震痕跡としての評価** 今回、液状化にともなう砂脈が、発掘調査所見による少なくとも地山および奈良時代の下層整地土を貫進していることが認められた。しかしこれらの砂脈が当時の地表面に達した際に形成する噴砂の形跡は認められていない。このためこの液状化を引き起こした震度5弱以上の大地震は、奈良時代以降に発生したものとはあきらかとなったが、それ以上のことは不明である。今後も周辺発掘調査の成果と合わせ検討をおこなってきたい。(村田泰輔)

#### 東院1期南北棟建物について

今回の調査では、1期の南北棟掘立柱建物SB19515・SB19970を調査区中央で検出した。これらは、柱間約2.7m(9尺)の間隔で柱筋を揃えて建てられており、今回の調査で新たに検出した東のSB19970には東廂が付く。このような規模・タイプの建物は、これまでの東院地区西辺の調査ではあまり知られておらず、その性格は不明である。そこで以下では、今回の調査区で見つかった2棟の併存可能性と建築時期差について考察し、平城宮内の同規模の建物をまとめ、今後、同種の建物の機能や性格に迫るための材料としたい。

**建物の併存可能性と建築時期差** SB19515・SB19970が併存していた可能性を否定する積極的な証拠は認められない。特に、両建物が柱筋をほぼ揃えて建てられているということは、両者の併存をむしろ肯定する事実である。また、SB19515の東側柱列とSB19970の西側柱列(西側の古い柱穴)の間には9尺という狭い間隙しかないが、2棟が併存した際の軒の出について建築上問題は生じない。したがって、SB19515・SB19970は、少なくともある一時期は併存した蓋然性が高いといえる<sup>13)</sup>。

とはいえ、SB19515・SB19970の間には建築時期差が想定される。そこで以下では、いずれの建物が先行していたのかについて検討しておきたい。SB19515・SB19970の柱穴は重複関係にないため、遺構の新旧から建築順について議論することは難しい。そこで、周囲の建物にも目を向けて考えてみる。北の第593次調査区で検出した東西棟掘立柱建物SB19999(桁行・梁行10尺等間、後述)の西妻柱列はSB19515の西側柱列と、また、SB19515の北妻柱はSB19999の南側柱と柱筋を揃えており、両者は同時期に建てられたと考えられる。一方、

SB19970の梁行は9尺等間であり、その東西側柱列および妻柱はSB19999の南側柱と柱筋が揃わない。ところで、SB19970の身舎の柱穴は、西側の古い柱穴掘方を東側の新しい柱穴掘方が壊しており、SB19970は後になって1尺ほど身舎の柱を東にずらして建て替えられたと考えられる。これにより、SB19970の新しい西側柱列はSB19999の南側柱と柱筋が揃うこととなる。以上の状況に鑑み、SB19970はSB19515・SB19999に先行して建てられたと推測することができる。元来存在したSB19970の周囲にSB19515・SB19999が新しく建てられた後に、SB19999に西側柱列だけでも揃えるためにSB19970を建て替えたのではないだろうか。

上記にもとづき、推測される建築順について以下にまとめる。まず、東廂が付かないSB19970が単独で建てられた。次いで、SB19970の西隣に柱筋を揃えてSB19515が建てられ、また、SB19515と柱筋を揃えたSB19999が北に建てられた。このSB19999の南側柱に西側柱列を揃えるために、SB19970が1尺ほど東に建て替えられ、それと同時あるいは後に東廂が取り付けられたと考えられる。なお、最終的にSB19515とSB19970が併存していた蓋然性は高いが、今のところ確証はない。

**同規模建物の類例** 平城宮跡内におけるこれまでの調査で、桁行9間以上12間以下、梁行2間の南北棟掘立柱建物を23棟検出している(表34)。これらの建物は宮内に広く分布するが、このうち9棟は東院地区で検出しており、他の地区に比べて多いといえる。時期は、奈良時代前半が9棟、奈良時代中頃が3棟、奈良時代後半が10棟、時期不詳が1棟あり、奈良時代の前半と後半いずれの時期にも建てられていたことがわかる。

これらの建物の半数超は桁行が奇数間(9間あるいは11間)であるが、桁行偶数間(10間あるいは12間)の南北棟掘立柱建物も10棟が認められ、このことは偶数間の南北棟掘立柱建物が必ずしも変則的なつくりではなかったことを示している。これらのうち、桁行10間の南北棟掘立柱建物は、今回の調査区で検出したものを含めて7棟である。なお、北方官衙で検出したSB9900Bは、SB9900Aの建て替えであり、両者ともに一部または全部が床張りである。また、今回の調査区で検出したSB19515・SB19970のように、第二次大極殿東外郭のSB6700・SB6701(奈良時代後半)は桁行・梁行ともに約3.0m(10尺)

等間であり、柱間を揃えて東西に並び建つが、両者の間隔は約6.0m (20尺)と若干広い。さらに、いずれの建物にも廂は付属せず、今回の調査区のSB19515・SB19970とはやや趣が異なっている。馬寮からも桁行10間、梁行2間の南北棟掘立柱建物が1棟見つかったが、桁行9.5尺等間、梁行11尺等間と他類例に比べてやや変則的な寸法である。

次に、南北棟掘立柱建物の立地について考えてみたい。建物の宮内での分布をみると、その多くが官衙地区や居住空間に配置されていることがわかる。とくに、東西に狭隘な地区(東院・北方官衙・内裏外郭・第二次大極殿東外郭)に南北棟建物が多く、有効な空間利用を意図して建てられていたと推測される。また、桁行10間以上の

偶数間の南北棟建物は、東院の他には官衙地区に主に造られている。上記の例外は東区朝堂院の下層東二・三堂建物(SB12930・SB13650)であるが、これらは奈良時代前半に下層朝堂院を構成する建物であり、空間構成上、また機能的にも異なる性格をもつ。

以上、東院1期の南北棟掘立柱建物SB19515・SB19970が一体の建物ではなく、両者の間に建築時期差があった可能性を示した。これらの南北棟建物の機能や性格については、上記の類例に今後の周辺調査区や宮外の成果もあわせ引き続き検討していきたい。(山藤)

表34 平城宮内における南北棟掘立柱建物(桁行9間以上12間以下・梁行2間)

No.	地区	調査次数	遺構番号	時期	桁行(間)	梁行(間)	桁行(m)	梁行(m)	廂	備考	文献
1	東院	481、503、584	SB19515	奈良時代前半	10	2	29.6	5.9	-	桁行・梁行約3.0m(10尺)等間	『紀要2012』162頁、『紀要2018』。
2	東院	584	SB19970	奈良時代前半	10	2	29.6	5.3	東	桁行約3.0m(10尺)等間、梁行約2.7m(9尺)等間、廂出約3.3m(11尺)	『紀要2018』。
3	東院	43、270	SB5750	奈良時代前半	9	2	-	-	東	桁行10尺等間、梁行9尺等間、廂出9.75尺	『年報1997-Ⅲ』15-16頁。
4	東院	104	SB8580	奈良時代中頃	11	2	-	-	東	桁行9尺等間、梁行10尺等間、廂出9尺	『昭和52平城概報』11-12頁。
5	東院	104	SB8570	奈良時代中頃	8以上	2	-	-	-	桁行・梁行10尺等間	『昭和52平城概報』11頁。
6	東院	446、469	SB19350	奈良時代後半	9	2	-	-	-	桁行・梁行約3.0m(10尺)、礎石建物の可能性	『紀要2011』164頁。
7	東院	503、584	SB19585	奈良時代後半	9	2	26.6	6.0	西	桁行・梁行約3.0m(10尺)等間	『紀要2014』133頁。
8	東院	110	SB9072	奈良時代後半	9	2	-	-	-	桁行8尺等間、梁行7尺等間、東西棟建物SB9071の東、東面大垣沿い	『平城報告Ⅴ』46頁。
9	東院	43、270	SB5730	奈良時代後半	9	2	-	-	-	桁行8尺等間、梁行9尺等間、西脇殿	『年報1997-Ⅲ』17頁。
10	北方官衙	129	SB9900A	奈良時代前半	10	2	-	-	-	桁行・梁行9尺等間、床張り建物	『昭和56平城概報』5頁。
11	北方官衙	129	SB9900B	奈良時代後半	10	2	-	-	西	桁行・梁行9尺等間、廂出9尺、身舎南2間分のみ床張り、SB9900Aの建て替え。	『昭和56平城概報』6頁。
12	内裏	12	SB650	奈良時代前半	9	2	26.5	-	-	桁行・梁行10尺等間、内裏正殿東第二脇殿	『平城報告ⅩⅢ』40頁。
13	内裏北外郭	13西	SB960	奈良時代前半	11	2	32.45	5.9	-	桁行・梁行2.95m(10尺)等間	『平城報告Ⅶ』40頁。
14	内裏東外郭	33	SB4290	奈良時代後半	12	2	-	5.94	-	2.5間南に柱筋を揃えてSB3530が建つ。	『平城宮第28.29.33次発掘調査概報』
15	内裏東外郭	33	SB3530	奈良時代後半	9	2	-	5.94	-	2.5間北に柱筋を揃えてSB4290が建つ。	『平城宮第28.29.33次発掘調査概報』
16	第二次大極殿東外郭	70南	SB6700	奈良時代後半	10	2	-	-	-	桁行・梁行約3.0m(10尺)等間、6.0m東にSB6701が柱間を揃えて並び建つ。	『平城宮第69・70次発掘調査概報』7頁。
17	第二次大極殿東外郭	70南	SB6701	奈良時代後半	10	2	-	-	-	桁行・梁行約3.0m(10尺)等間、6.0m西にSB6700が柱間を揃えて並び建つ。	『平城宮第69・70次発掘調査概報』7頁。
18	東区朝堂院	173	SB12930	奈良時代前半	12	2	36	6.0	西	桁行・梁行約3.0m(10尺)等間、廂出約3.0m(10尺)、東第二堂下層	『昭和61平城概報』4頁。
19	東区朝堂院	203	SB13650	奈良時代前半	12	2	-	-	西	桁行・梁行8尺等間、東第三堂下層	『1989平城概報』21頁。
20	中央区朝堂院内庭	376	SB18664	時期不詳	9	2	-	-	-	桁行・梁行約2.2m(8.5尺)	『紀要2005』90頁。
21	中央区朝堂院東南外	185	SB13124	奈良時代前半	9	2	26.7	6.0	西	桁行北8間約3.0m(10尺)等間、南端1間約2.7m(9尺)、梁行約3.0m(10尺)、廂出約2.7m(9尺)	『昭和62平城概報』7頁。
22	大膳職	4	SB176	奈良時代後半?	9	2	-	-	東西	桁行・梁行10尺等間	『平城報告Ⅳ』
23	馬寮	52	SB6172	奈良時代中頃	10	2	28.6	6.6	-	桁行9.5尺等間、梁行11尺等間、東脇殿	『平城報告ⅩⅢ』37頁。

## 4 第593次調査

### 基本層序

地表から表土・整備盛土（厚さ0.1～0.3m）、旧耕作土・床土（0.1～0.4m）、遺物包含層（礫混じり褐色粘質土、約0.1m）が堆積し、調査区北部では砂礫混じりの褐色土、南部で

は褐色粘質土の地山に達する。調査区西南部では、小礫が多く混じる褐色砂質土による奈良時代の整地土が薄く遺存していた。遺構検出は奈良時代の整地土および地山上面でおこなった。遺構面の標高は66.2～66.6mである。

### 検出遺構

奈良時代の掘立柱建物・塀、溝、井戸などを検出した

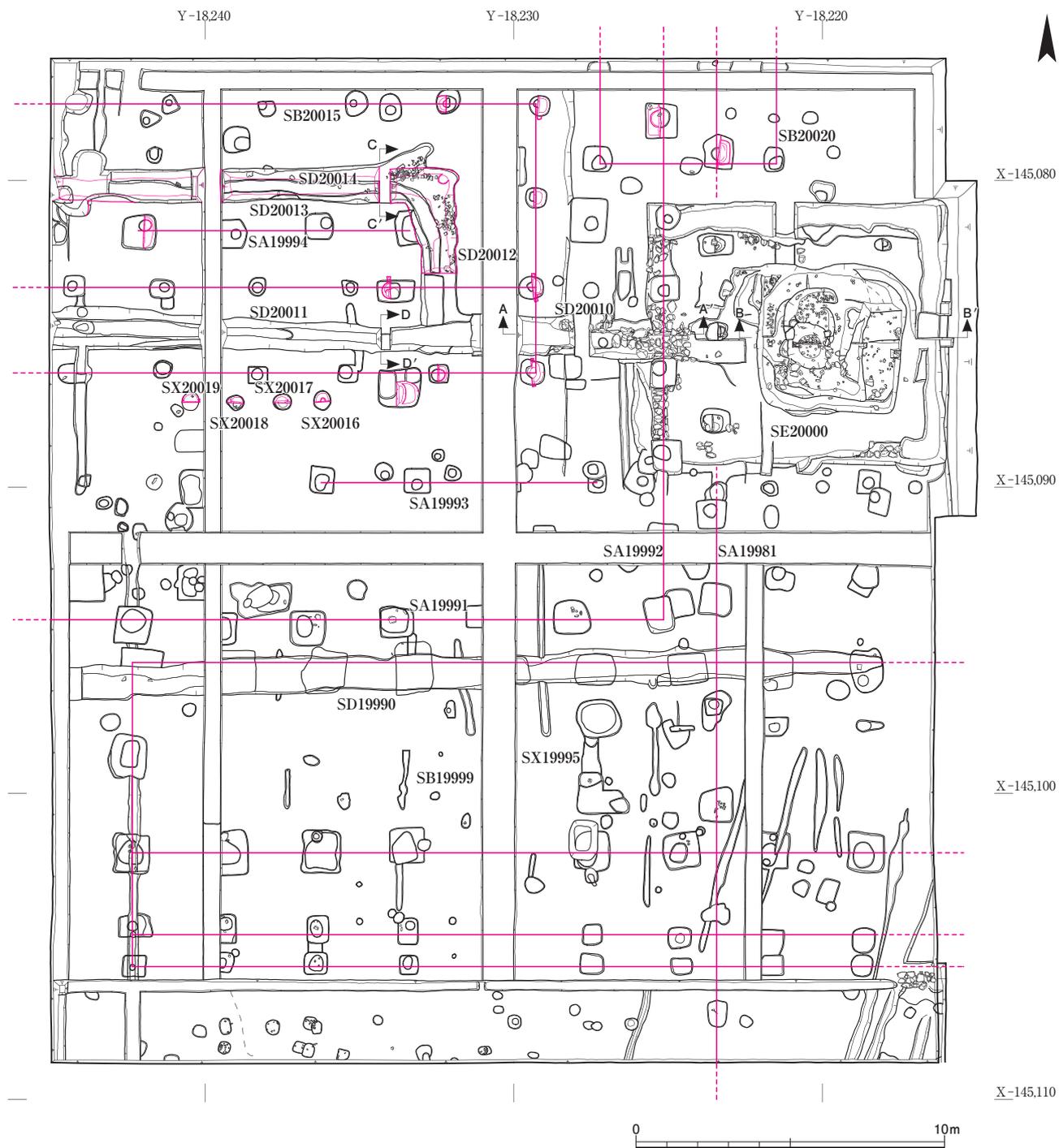


図205 第593次調査区遺構図 1 : 200

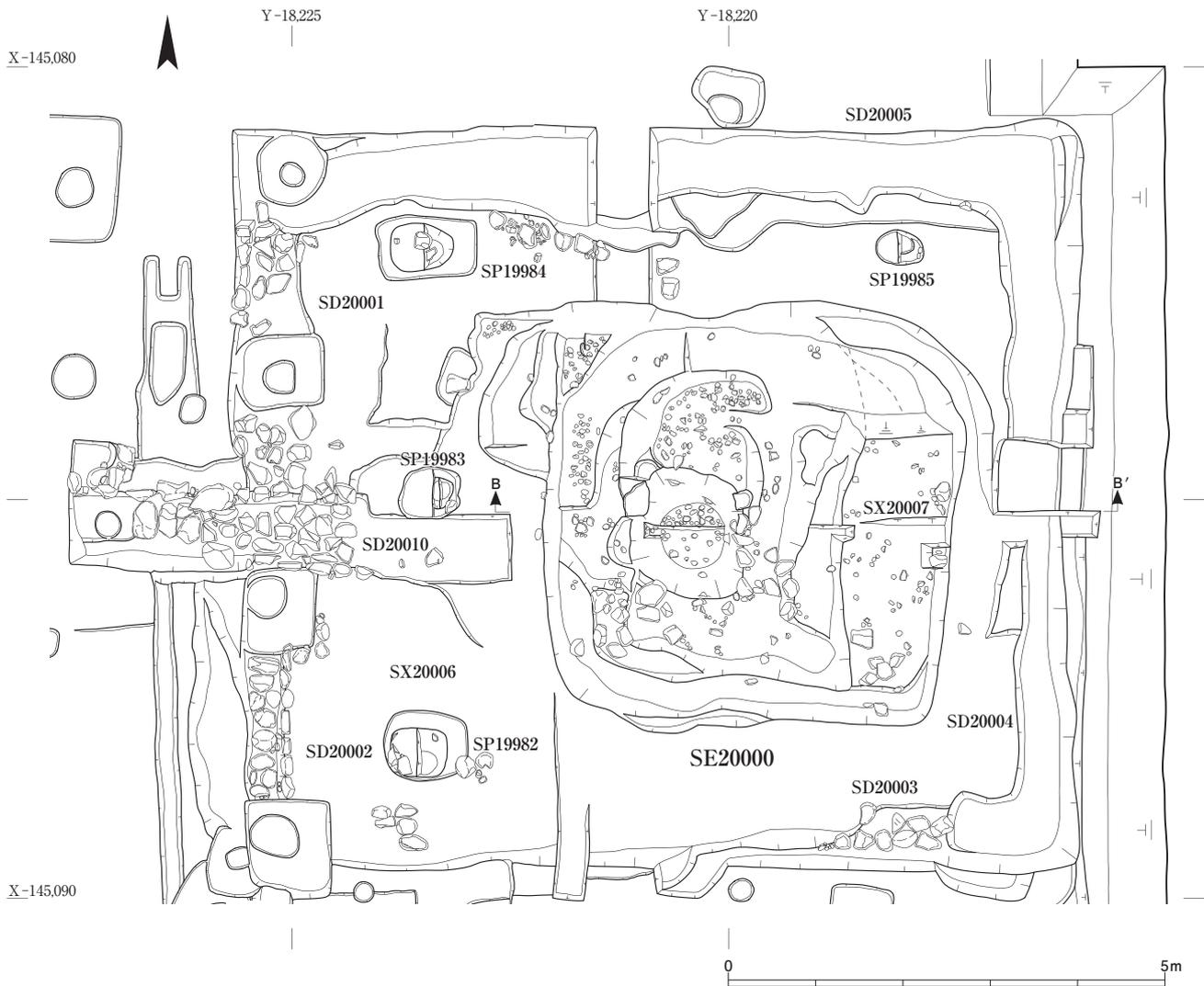


図206 井戸SE20000遺構図 1 : 80

(図205)。これらの遺構は数時期に区分できるが、既調査区で検出した遺構と連続または重複する遺構が少なく、従来の東院地区の調査で把握されてきた6時期の遺構区分とは対応が難しいため、各遺構の柱配置と重複関係に基づいてA～D期に区分した。A期は奈良時代前半、B～D期は奈良時代後半から末期に位置づけられる。

#### A期の遺構

**東西棟建物SB19999** 調査区南部で検出した東西9間以上、南北2間の東西棟建物。調査区の東方に続く。一部の柱穴で添束とみられる小穴を確認したことから、床張りの建物であったと考えられる。柱間寸法は約3.0m(10尺)である。身舎の柱掘方は一辺1.2～1.4m、深さ0.6～1.0m。身舎南側柱列の南方約2.7m、3.6mに二条の東西柱穴列があり、南面廂と床束など一連の建物を構成する遺構とみられる。これらの柱穴は一辺0.7～0.8m、深さ0.3～0.4mで、南の柱穴列がやや深い。一部の柱穴を断ち割った結果、建て替えの可能性が考えられたため、第595次調査で引き続き調査を継続している。

**東西塀SA19993** 調査区中央部で検出したSB19999と

柱筋を揃える東西塀。3間分を検出した。柱掘方は一辺0.6～0.8m。

**東西塀SA19994** 調査区西北部で検出したSB19999と柱筋を揃える東西塀。3間分を検出した。後述するSD20012と重複し、SA19994が古い。柱掘方は一辺0.9～1.1m、深さ約0.4mである。

#### B期の遺構

**南北塀SA19981** 調査区東部で検出した南北塀。調査区東北部では後述するSE20000により壊されており、SE20000の北では1間分、南では7間分を確認した。南端は第584次調査で検出した東西塀SA19516と接続する。掘方は一辺約0.6mと一辺約1.1mの2者があり、不揃いである。また柱間寸法も等間ではなく約3.3m(11尺)と約3.6m(12尺)の2者がある。

#### C期の遺構

**井戸SE20000** 調査区東北部で検出した大型の井戸(図206)。井戸枠を据えるための掘方と、四周に石組溝を配する掘方外周の空間から構成される。

井戸枠掘方は一辺約4.6mの平面方形である。後述す

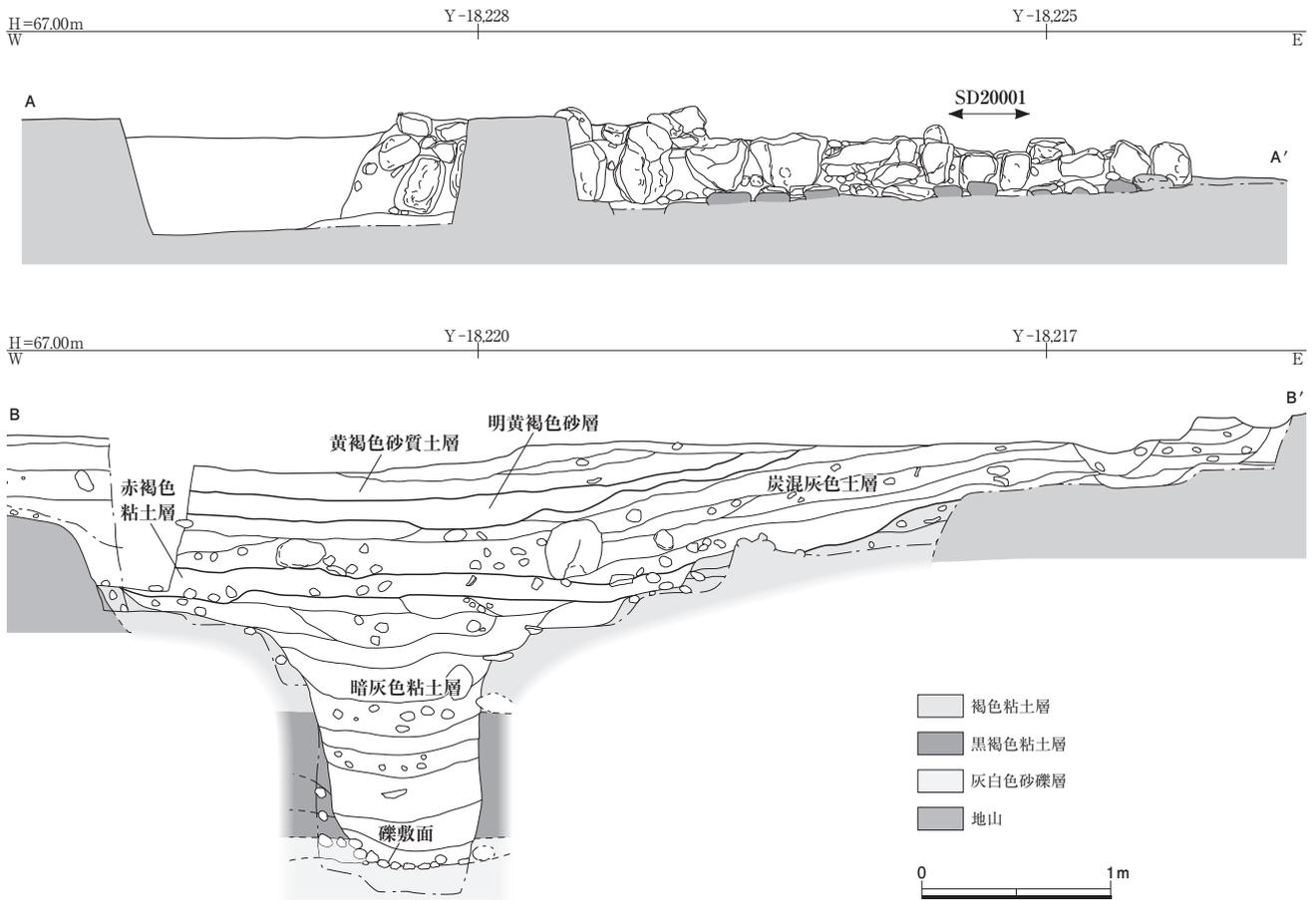


図207 東西溝SD20010B 北壁立面図(上)・井戸SE20000 断面図(下) 1:40

るように、調査は井戸枠抜取穴のみにとどめたため、掘方の深さは確認していない。抜取穴底面(標高64.2~64.3m)で、径3~10cmの礫を敷いた直径約0.7mの円形を呈する面を検出した(図207下)。この礫敷面が井戸枠据付となる掘方埋土内へと続くこと、礫敷面下位には灰白色砂礫層が少なくとも約10cmは続くことを確認した。灰白色砂礫層からは奈良時代に属する須恵器片が出土した。抜取穴の壁面観察によると、礫敷面の上位には黒褐色粘土が標高65.1m前後まで、褐色粘土が標高65.4m前後まで積まれている。褐色粘土の上面には人頭大の石が据えられており、石の上端は標高65.5~65.6mでほぼ揃う。抜取穴の東では、拳大の礫が混じる褐色粘土を積み、ステップ状に高まる段(SX20007)を検出した。標高約65.7mでは東西幅約0.5m、標高約66.0mでは東西幅約1.0mで掘方東面(標高約66.3m)に達する。SX20007上面では、炭混じりの灰色砂質土を埋土とする径0.2m前後の不整形の小穴を検出した。

井戸枠の抜取穴は掘方中央西寄りで見出した。東西約1.3m、南北約1.5mの不整形の平面プランを呈し、西北部が広がる。井戸枠は完全に抜き取られており、関連する木材も出土していない。抜取穴周囲では、東面と南面で上述の人頭大の石を検出したが、西面と北面では石は遺存せず、径0.2~0.5mの複数の凹みを見出した。抜

取穴は礫敷面直上から人頭大の石が据えられた標高65.5m付近まで暗灰色粘土層が堆積し、ここから土器や木簡・木片・檜皮片が出土した。さらに上位では赤褐色系の粘土が厚さ約0.2m、炭・礫石・瓦混じりの土(炭混灰色土)が0.2~0.4m、遺物の僅少な明黄褐色砂質土(明黄褐色砂)が約0.1m、しまりの良い黄褐色砂質土が約0.2m堆積し、掘方全体が埋められている。赤褐色粘土層は抜取穴付近が高まり土饅頭状を呈していた。炭混灰色土層と明黄褐色砂層は東から西に向けて堆積し、黄褐色砂質土層は水平を指向する。

井戸枠掘方の周囲では、東西約9.5m、南北約9.0mの方形の範囲が深さ約0.3m掘り込まれている。掘り込みの四周に石組溝SD20001~20005を巡らせ、西辺中央には後述する東西溝SD20010が接続する。西辺北半の石組溝SD20001は両側石が据えられており、幅約0.5m、深さ約0.1m。SD20002は東側石のみで、幅約0.5m、深さ約0.1m。1ヵ所のみ側石の代わりに磚が用いられている。南辺のSD20003は側石が抜き取られており、底石が一部残る。東辺・北辺のSD20004・20005は、側石と底石が布掘り状に完全に抜き取られている。また、石組溝と井戸枠掘方との間には、拳大の礫が多く分布し、これを灰黄色砂質土が覆う(SX20006)。調査時の観察では、灰黄色砂質土は水はけがよく、乾燥するとよくしまる特徴が

認められた。井戸枿掘方の北面では上面が平坦な人頭大の石列を検出した。石の上端は標高約66.6mである。SX20006上面では4基の穴(SPI9982~19985)を検出した。径0.5~0.7mの不整形を呈し、深さ0.2~0.4mで、黄褐色土で埋める。

以下、SE20000の構造を復元する。井戸枿抜取穴底面で検出した礫敷面が、本来の井戸枿底面に相当すると考えられる。礫敷面より下位の灰色砂礫層から奈良時代の須恵器が出土したことから、灰色砂礫層は地山ではなく掘方埋土にあたり、掘方底面から礫敷面まで砂礫層を構築した後、井戸枿を据えたと考えられる。抜取穴底面の礫敷面が直径約0.7mの円形を呈していたことから、井戸枿は外径約0.7mの刳抜式であった可能性が高い。抜取穴の観察から、井戸枿は北西方向に抜き取ったと考えられる。井戸枿周囲で検出した上端が揃う人頭大の石が井戸枿の基礎となっていた可能性がある。抜取穴西面と北面の複数の凹みはこれらの石の抜き取跡であろう。井戸枿の東にはステップ状の段SX20007が構築されており、東から井戸枿に接近するための施設であったとみられる。SX20007上面で検出した不整形の小穴は、本来石敷が施されており、その抜き取穴の可能性もある。

井戸枿周囲にはSD20001~20005を配し、これらの水はSD20010に流れる。石組溝と井戸枿掘方の間の空間SX20006は、拳大の小礫の上に灰黄色砂質土による整地が施されている。井戸枿掘方北面に遺存する石列からみて、SX20006は全体に石敷が施されていた可能性が考えられる。SPI9982~19984はB期の南北塀SA19981と柱筋が揃うが、規模・形状と埋土が異なることから別遺構と判断する。これらの穴を礎石据付穴とみて南北約6m、東西約5.4mの礎石建ちの井戸屋形が存在し、井戸枿の抜き取りとともに撤去されたものと解釈する。この場合、東南隅の据付穴が確認できていないが、井戸屋形の解体や石組溝の抜き取りがおこなわれた際に失われたものと考えられる。

以上をふまえてSE20000の構築・廃絶過程を復元する。井戸の構築は、①東西9.0m、南北9.5mの範囲を約0.3m掘り下げる、②一辺4.6m四方を井戸枿本体の掘方として掘り下げる、③掘方底面に砂礫層を構築する、④掘方中央西寄りに外径約0.7mの刳抜式の井戸枿を設置する、⑤粘土を主体に井戸枿周囲を標高約65.1m前後まで

埋め戻す、⑥井戸枿周囲に人頭大の石組を設置し井戸枿の基礎とする、⑦井戸枿・井戸枿の東側にSX20007を構築する、⑧掘方の外周空間に石組溝SD20001~20005と東西溝SD20010を設置し、整地を施してSX20006の空間を設ける(井戸屋形の設置もこの段階とみられる)、⑨井戸の完成・使用開始、という過程が復元できる。

また、井戸廃絶は、①井戸屋形・井戸枿の撤去により井戸枿の抜き取りのための作業スペースを確保した後、②井戸枿を北西方向に抜き取る、③抜き取穴を暗灰色系の粘土を主体に埋め戻す、④抜き取穴直上部分に赤褐色系の粘土で整地を施す、⑤東から炭・礫・石・瓦混じりの炭混灰色土、遺物の僅少な明黄褐色砂質土を入れる、⑥しまりの良い黄褐色砂質土で水平を指向して整地を施す、という過程が復元できる。

**東西溝SD20010** SE20000の西辺中央付近から西へ直線的に延びる。幅約1.2m、長さ約8.5m。調査区中央部で東西溝SD20011とL字状に屈曲するSD20012・20013に分岐する。2時期の変遷があり、当初は深さ0.2~0.5mの素掘溝(SD20010A)だが、東端から西へ約4.6mの範囲はSD20010Aの堆積層である灰黄褐色砂質土上に橙褐色粘土を貼って嵩上げし、側石と底石で護岸する(SD20010B)(図207上)。SD20010Bは幅0.5~0.6m、深さ0.2~0.4mである。側石はSD20001との合流点までは小ぶりの石を用い、以西は人頭大の石を立てて用いる。底石は1~3石で最東端の底石上面の標高は66.25m、最西端の標高は66.16m。南の側石は抜き取られている。

**東西溝SD20011** 幅0.8~1.0m、深さ0.5~0.6mの東西素掘溝(図208右)。SD20010の西に続き、調査区の西方へと続く。灰黄色砂層が堆積し、褐色砂質土・灰黄色砂質土により一時に埋められている。埋立土より多量の土器が出土した。

**溝SD20012・20013** SD20010から北へ分岐する幅約1.2mの素掘溝。地山である砂礫混じりの褐色土を掘り込み、溝の断面形状は箱形を呈する(図208左)。南北方向のSD20012は約5.0mで西に折れ東西方向のSD20013となる。底面は北へ緩やかに下るが、X-145,083付近を境に北側では底面の洗掘が目立つ。SD20013は深さ0.6~0.8mで調査区の西方へと続く。SD20012・20013はSD20011と同様、灰黄色砂層が堆積し、褐色砂質土・灰黄色砂質土により一時に埋められている。埋立土より

多量の土器が出土し、特に屈曲部付近を中心に土器に加えて丸瓦と平瓦が集中して出土した(図209)。なお、SD20012・20013とSD20010は埋め立て後、幅0.6m、深さ0.2~0.3mの素掘溝(SD20014)が掘られており、ここからは近世の陶器・土師器が出土した。

**東西棟建物SB20015** 調査区西北部で検出した東西6間以上、南北3間の南廂付東西棟建物。調査区の西方へと続く。柱間距離は身舎が約3.0m(10尺)等間で、廂の出が約2.7m(9尺)である。柱穴は一辺0.6~0.8m、深さ約0.4m。SD20013が棟通りの中心を、SD20011が廂の中心を通ることから、SD20011~20013と一体で設けられた覆屋と考えられる。

#### D期の遺構

**東西溝SD19990** 調査区中央部で検出した東西素掘溝。調査区の西方へと続く。西でやや南に振れる。後世の削平が著しく幅約1.0m、深さ0.1~0.2m、長さ約27.0m分を確認した。

**東西塀SA19991** 調査区中央部で検出した東西塀。6間分を検出し、東端はSA19992と接続する。西で南にやや振れており、SD19990と平行する。柱間距離は2.7~3.3m(9~11尺)である。柱穴は一辺0.8~1.2m、深さ約0.6m。

**南北塀SA19992** 調査区東北部で検出した南北塀。6間分を検出し、調査区の北方へと続く。SE20000西辺の石組溝SD20001・20002を壊す。柱間距離は2.7~3.3m(9~11尺)である。柱穴は一辺0.8~1.1m、深さ約0.6m。

#### 時期不明の遺構

**建物SB20020** 調査区東北部で検出した東西2間、南北2間以上の建物。柱間距離は2.7~3.0m(9~10尺)。調査区外北方に続く。柱穴は一辺0.6~0.9m。

**小穴SX20016~20019** 調査区西北部で検出した東西4基の小穴列。いずれも径約0.6m、深さ約0.2mで、埋土は炭・灰が混じる灰黄褐色砂質土で土師器甕片などが出土した。SB20015の東から3間目の柱間にSX20016・20017が、4間目の柱間にSX20018・20019がそれぞれ位置するようだが、SB20015との関係はあきらかでない。

**柱穴列SX19995** 調査区南部中央で検出した南北に並ぶ2基の柱穴。北の柱穴は東西1.3m、南北1.5mの長楕円形を呈し、南の柱穴東西1.5m、南北0.8mで長方形を呈する。2基の柱穴間の距離は約2.7mで、幅0.5mの溝で接続する。この溝の中間にあたる底面で径約0.4m、

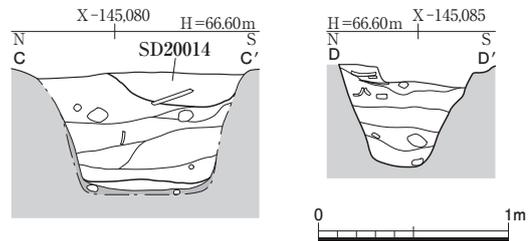


図208 東西溝SD20011(右)・SD20013(左)断面図 1:40



図209 SD20012・SD20013遺物出土状況(北西から)

深さ約0.1mの小穴を検出した。当初、SB19999の間仕切りの柱穴と想定したが、断割の結果SB19999の柱穴よりも深く、規模が大きいため別時期の遺構と判断した。

#### 出土遺物

**土器** 第593次調査では整理用コンテナ93箱分の土器・土製品が出土した。調査区南部では出土量が少ないのに対し、調査区北部では東西溝SD20011とL字状に屈曲する溝SD20012・20013を中心に奈良時代後半頃の土師器・須恵器が多く出土した。これらの土器は現在整理中であり、SD20011~20013の埋め立てにともなう土器と組成について概要を報告する(図210・211)。

SD20011~20013の埋立土はSD20011では3層、SD20012・20013では2層に分けて取り上げたが、各層間で接合する土器も多く、あまり時間をおかずに埋められたものと考えられる。

SD20011~20013からは、土師器杯A、杯B、杯C、杯E、杯蓋、椀A、椀C、皿A、高杯A、盤A、壺A、甕A、甕C、甌、竈、大型蓋、須恵器杯A、杯B、杯C、杯B蓋、杯F、杯H、皿A、皿B、皿B蓋、皿C、鉢F、鉢D、高杯、盤A、壺A蓋、壺A、壺E、甕A、甕B、

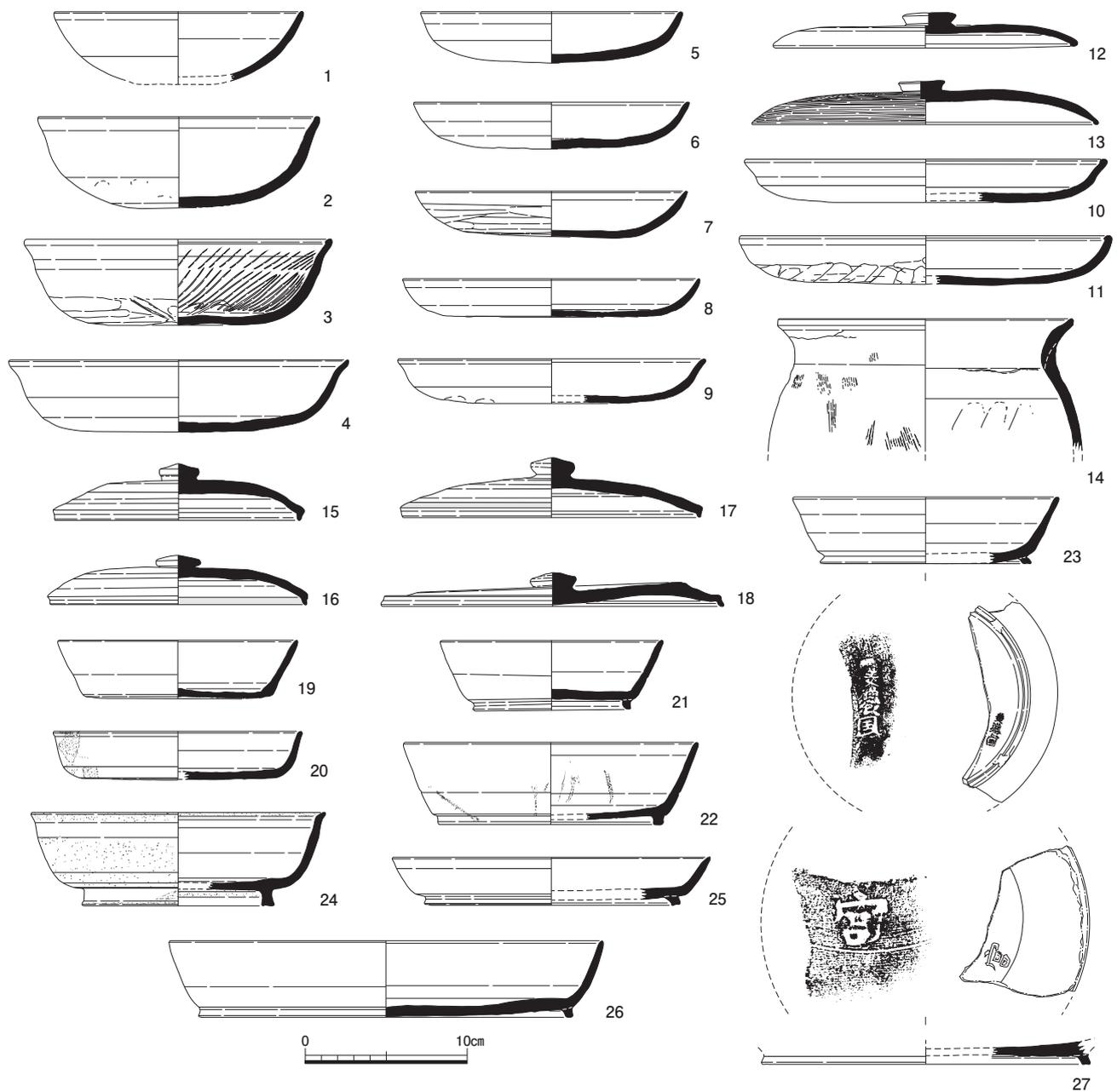


図210 第593次調査出土土器(1) 1:4(拓本は1:2)

甕Cなどが出土した。このほか、暗文須恵器や焼成が軟質で素地が淡褐色を呈する椀・壺片、接合された土師器片が出土した。

図210に食器類と小型調理具を図示した。1~14は土師器。1は椀A。内外面が磨滅しており、調整は不明。2~4は杯A。2は器高が高く、椀形に近い。椀Xの可能性もある。器壁が厚く、胎土も砂粒が多く混じる粗製の作りである。3は内面に二段放射暗文を施し、外面をb手法で調整する。底部外面に焼成前の凹みがあり、こ

れに対応して底部内面が盛り上がり、歪みが生じている。4は器高がやや浅く、口縁部が外方に開く形態で、端部の巻き込みが緩い。内面の磨滅が著しく、暗文の有無は確認できない。5・6は杯C。口縁端部内面に内傾する面をもつ。器形が皿形化しており、皿Aとはほぼ同形態である。7~11は皿A。7は器高がやや深く、平底の底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部外面直下までヘラケズリを施すc手法である。8は口縁端部を丸くおさめる。9は口縁端部が

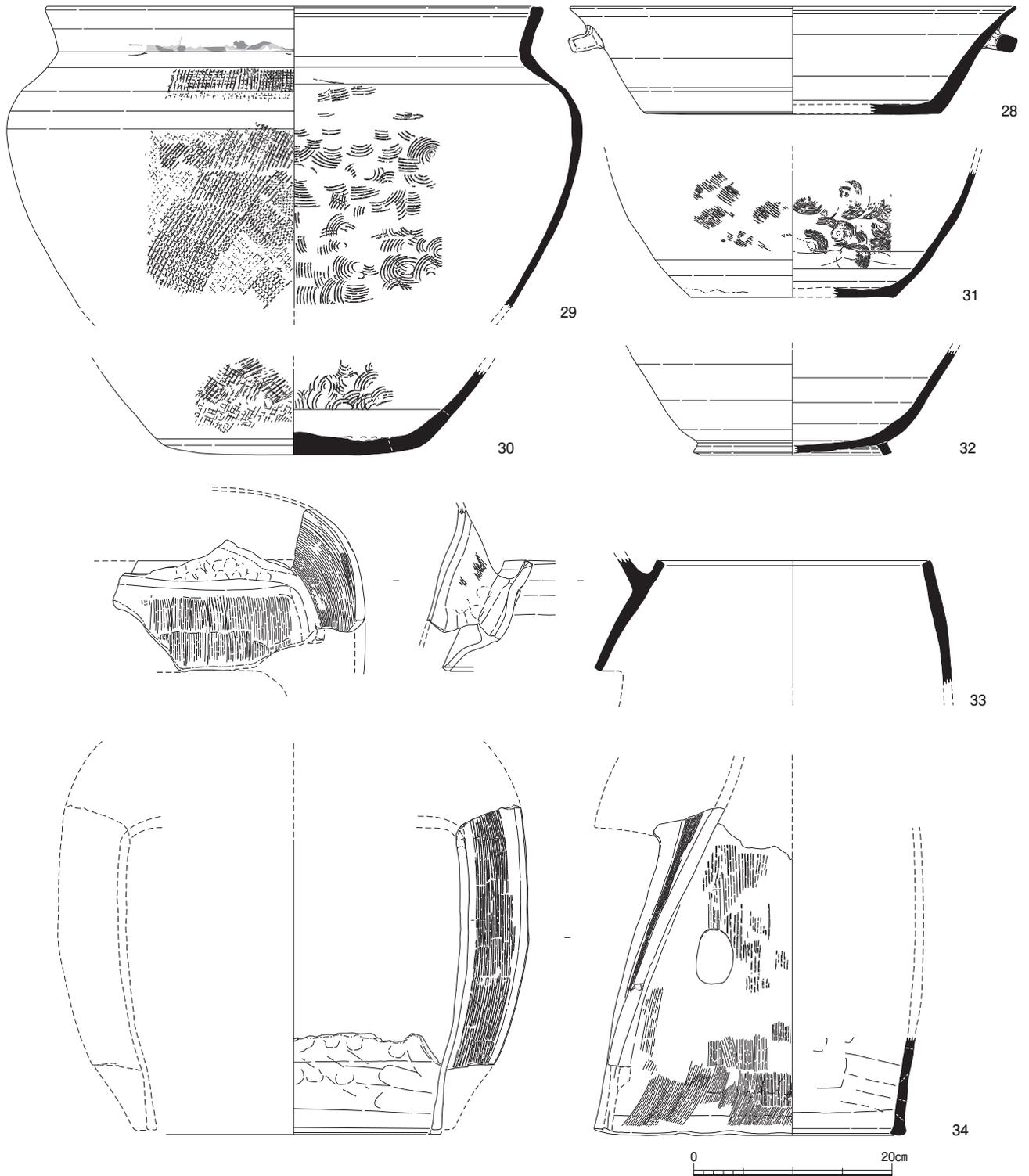


図211 第593次調査出土土器(2) 1:6

小さく外反する。10は口縁部を強く横ナデし、口縁端部を肥厚させる。内外面が磨滅しており、調整は不明。11はb0手法で調整し、口縁部と底部の境に分割ヘラケズリを施した後、底部に一方向のヘラケズリを施す。底部

外面に「×」状の焼成後ヘラ描きを施す。12・13は杯蓋。扁平な形態で、頂部にボタン状のつまみを貼り付ける。土師器杯蓋には板状のつまみをもつものもある。14は小型の甕A。胴部の張りが弱い形態で、口縁部がくの字状

に外反し、端部を丸くおさめる。内面には薄い膜状のコゲが付着し、外面はススが附着する。

15～27は須恵器。15～18は杯B蓋。15・16は頂部が平坦で緩やかに口縁部が降る。17は頂部から緩やかに口縁部が降る。18は平坦な頂部から口縁部が屈曲する。軟質の焼成である。19・20は杯A。口径はほぼ同じだが器高と形態が異なる。19は平坦な底部から口縁部が外方に直線的に立ち上がる。焼成が軟質で白色を呈する。20は平坦な底部から口縁部が立ち上がり、端部を丸くおさめる。21～23は杯B。法量の大・小が認められる。21・22は焼成が軟質で灰白色を呈する。ともに高台を底部外縁近くに貼り付ける。23は底部外面に「美濃国」の焼成前刻印がある。老洞古窯跡群で分類されたA-II-2類にあたる<sup>14)</sup>。24は杯F。底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部は外反する。25～27は皿B。25は器高が低く、口縁部が外方に開く。焼成がやや軟質である。26は緩やかに口縁部が立ち上がる。焼成が軟質で黒灰色を呈する。27は底部外面に「宮」の焼成前刻印がある。平城第172次調査SD2700出土資料<sup>15)</sup>と同印とみられる。

次に、大型貯蔵具・調理具を図211に示した。28は須恵器盤A。平底の底部から外反気味に口縁部が立ち上がる。断面が方形の把手を貼り付ける。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。29は甕C。復元口径は50.6cm。外面に格子叩き、内面には同心円状の当て具痕跡が認められる。頸部外面に有機質の付着物があり、紐などを括り付けていた可能性が考えられる。破片から胴部上位を復元できるが、底部の破片はみられない。30～32は甕の底部片である。30は平底の底部から丸みをもって体部が立ち上がる。31は外面に斜め方向の叩き調整と内面には当て具痕跡が残る。平底の底部と体部の境に稜をもつ。32は脚部を貼り付ける。33・34は土師器竈。33は廂部と焚口部上面。廂部は貼り付けにより、刷毛目調整を施す。胎土に赤褐色粒子や白色微砂を含む。復元口径は27.6cm。34は廂下部と基部の破片である。基部は復元基部径31.7cmで、幅4～5cmの粘土紐を輪積みして円筒を作る。外面を縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施し、廂部はハケ目調整である。側面に長楕円形の円孔を切り出す。SD20011～20013からは少なくとも大・小6個体以上の竈片が出土している。

SD20011～20013出土土器は土師器碗Aや外面c手法

で調整する杯A・皿Aの存在から奈良時代後半に位置づけられる。これは、同時に廃絶したとみられる井戸SE20000暗灰粘土層から出土した木簡の紀年(後述)とも矛盾しない。

また、SD20011～20013出土土器群は特徴的な土器組成を示す。整理期間の制約上、破片計測法を用いて暫定的に組成比を算出した。土師器(N=1699片)と須恵器(N=1454片)ではやや土師器が多い。土師器では食器類が約6割に対して、甕・竈など煮炊具類が約4割を占めており、須恵器でも食器類が約6割に対して、盤類と壺・甕などの貯蔵具類が約4割を占める。これらは、平城宮内で一般的な土師器食器類が多く出土する傾向に対し、須恵器食器類や須恵器盤・甕と土師器甕・竈が高率で出土する点で特徴的な土器組成である。

さらに、3・23など奈良時代前半に属する土器が一部含まれる点や傷ついた土器がみられる点も特徴である。各溝出土土器は出土状況から廃棄の同時性が認められることから、奈良時代前半から長期にわたって使用・保管された食器も含めて、溝の廃絶時に一括して廃棄されたものと考えられる。このほか、転用硯や墨書土器が少ない点も特徴といえる。

以上から、溝周辺では食器類に加えて、調理具・貯蔵具が使用・保管されており、溝の廃絶にあたり一括して廃棄されたものと考えられる。出土土器の様相からは溝周辺に食事・調理に関わる施設が存在していた可能性が高いと考えられる。

(小田)

**瓦磚類** 本調査区より出土した瓦磚類は表35に示した。井戸SE20000付近(井戸およびその上層の包含層等も含む南北9m×東西12mの範囲)から出土した瓦の出土量および調査区全体の出土量に対する比率をみると、軒丸瓦23点(60%)、軒平瓦28点(82%)、丸瓦80.3kg(44%)、平瓦327.4kg(52%)となり、瓦が井戸付近に集中している。井戸付近の軒丸瓦は6133Ka、6282Ba・Ca・G・H、6291Ab、6308A・B、6313A、軒平瓦は6663A・B、6664D、6682A、6689A、6691A、6721D・E・G・H、6732Aであり、出土数からみて6308A・B-6663A・B(Ⅱ-2期)と6282-6721(Ⅲ-1期)が主要な組合せであった可能性が高い。このほか、鬼瓦IAが2点、施釉磚5点も井戸付近から出土した。以上から、井戸に総瓦葺きの井戸屋形が存在したか、あるいは未調査の井戸の東方に瓦



図212 第593次調査出土施釉磚

表35 第593次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	種類	点数
6133	Ka	1	6663	A	7	平瓦 (斜格子タタキ)		1
	?	1		B	1	隅切平瓦		1
6282	Ba	1		?	2	鬼瓦 I A		2
	Ca	2	6664	D	1	鬘斗瓦?		1
	G	2	6682	A	1	用途不明道具瓦		3
	Ha	1	6685	A	1	磚		4
	H	1	6689	A	1	(緑釉)		2
	I	1	6691	A	1	(施釉)		3
6291	Ab	1	6721	D	1	凝灰岩		2
6308	A	3		E	1			
	B	2		G	2			
	?	1		H	3			
6313	A	1		?	5			
型式不明 (奈良)		19	6726	D	1			
時代不明		7	6732	A	1			
			近世		1			
			型式不明 (奈良)		5			
			時代不明		6			
計		44	計		41	計		19
	丸瓦		平瓦			磚	凝灰岩	レンガ
重量	183.009kg		628.135kg			12.015kg	13.404kg	0
点数	2084		10001			32	9	0

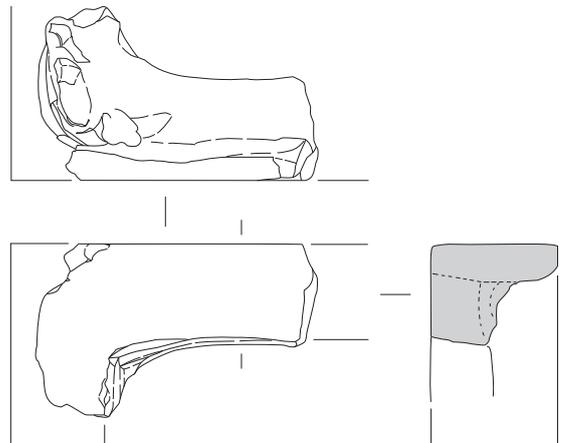


図213 第593次調査出土施釉磚 1 : 3

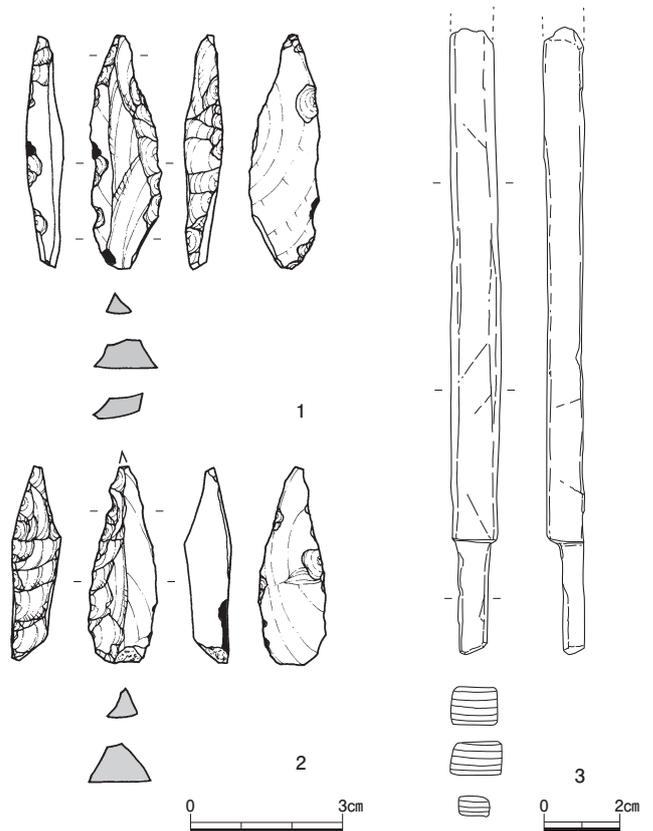


図214 第593次調査出土石器・木製品

葺きの建物があった可能性が考えられる。今後の調査に期したい。

井戸付近から出土した施釉磚はすべて粒度の細かい白色の胎土で、釉は剥離してほとんど残らない。このうち1点は平手面に深さ2cmほどの窪みをもつ特殊な形状で、厚みは5.0cmある(図212・213)。類似の資料はこれまで東院地区(第22・39・110・128・401・423次)から複数点出土しており、これらを参考にすると、全体は長方形で、窪みのない平手面、長手面、小口面に施釉し、窪みのある平手面には施釉していないことから、窪みのある平手面を底面として使用したと考える。(今井晃樹)

**石器** ナイフ形石器が2点出土した(図214)。いずれもサヌカイト製の国府型ナイフ形石器。1は、右側縁

のみにブランディングが認められ、下端のみ背面側からの打撃による。長さ4.68cm、幅1.38cm、厚さ0.69cm、重量4.3g。2は、左側縁のみに腹面側からブランディングが施される。下辺に自然面を残す。長さ3.90cm、幅1.34cm、厚さ0.90cm、重量4.4g。1は第584次調査区SA19516柱抜取穴、2は第593次調査区SD20014の埋土から出土しており、原位置から遊離している。(芝康次郎)

**木製品** 井戸SE20000から加工痕のある木片などが多

数出土した(図214)が、同遺構から採取した土壌の洗浄作業が現在進行中であるため、今後さらに増加するものとみられる。3は鎌形とみられる針葉樹材の木製品であるが、茎部の作り出しが片面のみの加工にとどまっており、未成品の可能性はある。(庄田慎矢)

**木筒** 井戸SE20000抜取穴(暗灰色粘土層)から4点出土した。①は紀伊国安諦(在田)郡からの荷札木筒。下部欠損のため品名などは不明。②も荷札木筒。裏面の年紀は、「字三年」は確実で、「字」の前の文字の残画は「寶」の下半分として矛盾はない。以上から、本木筒は天平宝字三年(759)の荷札木筒と考えられる。③は文書

- ④ □ (拾カ) (167)・24・3 019
- ③ □ 寶賢 (164)・26・3 081  
 □ 為定  
 □ 美濃国
- ② □ 字三年 (105)・26・3 081  
 □ (寶カ)  
 □ 郷戸主物部入
- ① □ 紀伊国安諦郡 (94)・16)・4 081  
 □ (幡陀カ)



図215 第593次調査出土木筒(赤外線画像は1:2)

木筒もしくは習書木筒。裏面は美濃国に関する何らかの内容を記す文章らしいが、詳細は不明。表面は貝を含む文字を習書するか。なお、美濃国は称徳天皇の大嘗祭の際の悠紀国である。④は詳細不明。「類」は瓜などの果実の他、堅塩を数える際などに用いられる。(馬場 基)

**井戸SE20000と関連遺構について**

SE20000は周囲に石組溝が付属する大規模なもので、派生するSD20010~20013とSB20015が一体となり計画的に設置されている。平城宮内では、これまで東院地区のほか内裏地区や造酒司地区などで似たような構造の大規模な井戸を検出している(表36)。SE20000は付属施設を含めると、内裏地区のSE7900に匹敵する宮内最大級の規模である。

井戸の構造をみると、大きな方形掘方を湧水層まで掘り下げた後に、砂礫を敷き込んで湧水の浄化を目的とした透水層を構築したとみられる。透水層の上には粘土層を構築するが、これは井戸枠の裏込土になると同時に、湧水を井戸枠に導く意図があったと考えられる。このような井戸枠掘方に礫や砂層による透水層を構築し、上位に水を通さない粘土層を積む状況は、石神遺跡SE800<sup>(6)</sup>、飛鳥京跡SE8061<sup>(7)</sup>、飛鳥池遺跡SE42<sup>(8)</sup>、平城宮内裏SE7900の事例でも確認することができ、平安宮内酒殿の井戸も同様である<sup>(9)</sup>。清浄な水を安定的に得るために宮都中枢部の井戸に採用された工夫であったと位置づけられる。さらに、SE20000は井戸枠が掘方の西に偏り、東側には段状のSX20007が構築されることから、SE20000の正面は東となり、井戸から汲んだ清浄な

表36 平城宮内の大型井戸

No.	地区	調査回数	遺構番号	規模 (井戸枠掘方)	井戸枠	井戸枠規模	付属構造	排水・配水施設	時期	文献
1	内裏	78次	SE7900A・B	9.4m×11.5m、 (一辺3.5~3.8m)	上段：横板組井桁、 下段：剝り抜き	上段：一辺1.6~1.7m、 下段：外径1.65m 内径1.3m	玉石敷・磚敷、 石組溝・磚敷溝	石組溝・磚敷溝	奈良時代前半 ~末	『平城報告XIII』
2	造酒司	22次北	SE3049	8.3m×8.0m	横板組	一辺約2.8m	礫敷・素掘溝、 井戸屋形	素掘溝	奈良時代前半 後期~末	『年報 1965』
3	造酒司	22次北	SE3046	5.4m×3.0m	横板組	東西5.4m×南北3.0m	井戸屋形	暗渠木樋	奈良時代前半 ~末	『年報 1965』
4	造酒司	241次	SE15800	7.0m×6.5m	上段：方形井桁、 下段：剝り抜き	上段：一辺1.54~1.60m、 下段：径1.4m	玉石敷・石組溝、 井戸屋形	石組溝・覆屋	奈良時代前半 後期~末	『1993平城概報』
5	東院	22次南	SE3230	9.0m×12m (約5m×約7m)	横板組	一辺2.1m	玉石敷・石組溝	石組溝	不明	『年報 1965』
6	東院	128次	SE9600A・B	一辺5.2mから 7.0mに造り替え (一辺約3m)	横板組	一辺1.35m	礫敷・石組溝	石組溝	奈良時代後半	『年報 1981』、『昭 和55平城概報』
7	東院	243次	SE16030	6m×9m (一辺約5m)	縦板組	径1.3m	玉石敷・石組溝、 井戸屋形	石組溝	奈良時代後半~ 平安時代初頭	『1993平城概報』
8	東院	593次	SE20000	9.5m×9.0m (一辺約4.6m)	剝り抜きか	径0.7m	礫敷・石組溝、 井戸屋形か	石組溝・覆屋	奈良時代後半	本報告

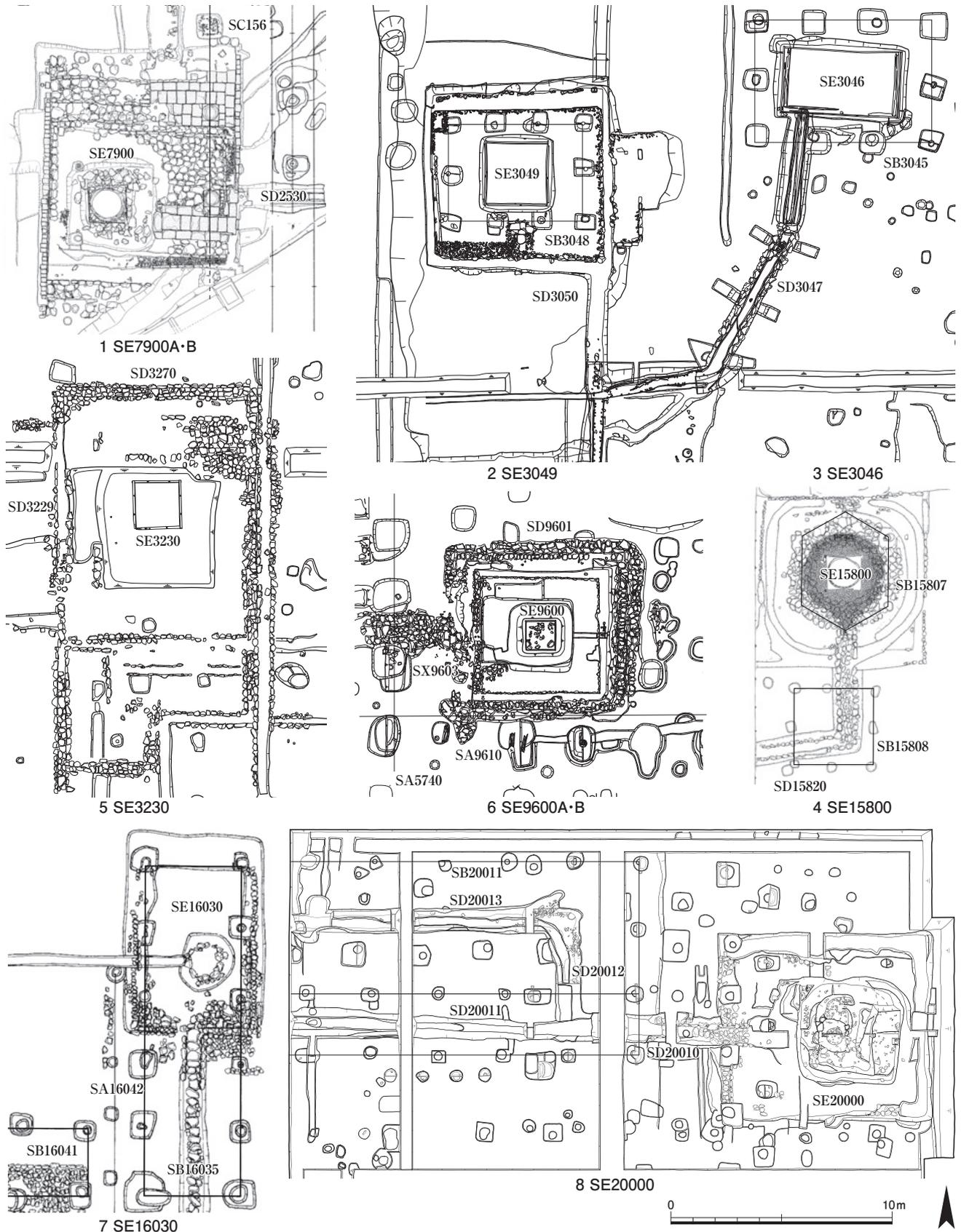


図216 平城宮内大型井戸集成図 1 : 250

水は主に東方へ運び出されていたと考えられる。また、SE20000は平城宮内で調査された井戸の中では残りが悪い点も特徴である。井戸枠および周囲の石敷・石組溝の抜き取りと丁寧な埋め戻し状況からみて、SE20000の廃絶後に空間利用が大きく変化したと考えられる。

また、SE20000から西に続くSD20010や分岐するSD20011～20013と覆屋SB20015の存在からは、井戸の水を計画的に溝へ配水し、利用していたことがうかがえる。このときSD20010には井戸屋形の雨落溝を兼ねたとみられる四周の石組溝の水も流入する構造であり、井戸の水に加えて雨水の利用も意図していたことがわかる。さらに、SD20010は石組溝に造り替えるものの、SB20015内にあたるSD20011・20012・20013は素掘りで護岸施設を持たない。これは地山に砂礫が多く混じることもあるが、激しい流水ではなく滞水状態を保って利用されていたためと解釈でき、SB20015内では溝の水を利用した活動をおこなっていたと考えられる。

SD20011～20013からは、多量の土器が出土しており、組成分析から杯や皿などの食器類に加えて須恵器盤・甕、土師器甕・竈などの調理具や貯蔵具が多くみられる点が特徴である。溝周辺に調理や食器類の保管をおこなった空間が存在しており、廃絶にともなって溝内に一括して廃棄されたものと考えられる。

以上から、SE20000は東院中枢部において清浄な水を確保するための井戸であり、関連遺構を井戸の水を効率的に利用する洗い場に類する施設であったと位置づける。出土遺物からみて調査区周辺は、奈良時代後半の東院中枢部における食膳を準備する厨に関連する空間であり、SE20000と関連遺構もその一郭を構成していたと考えられる。今後の周辺の調査により調理・配膳や食糧品・食器類を収納管理する諸施設に関わる遺構の検出が期待される。

(小田)

## 5 遺構変遷

以下では、第584次・593次調査区で検出した各遺構の変遷を整理する(図217)。

**1 期** 調査区南半に、東西の柱筋を揃えた長大な南北棟建物SB19515・19970が、おそらく時間差をともなって建てられる。また、SB19970の東廂から5.0m東に、南北に長い石列SX19971が建物にほぼ平行して造られる。

SX19971の東側には東院地区中枢部が広がっていたことが推定されるので、これと関連した構造物とも考えられる。調査区北半ではA期の東西棟建物SB19999が建つ。SB19515と柱筋が揃うことから両者は併存し、L字形の空間を構成していたとみられる。一方、SB19999とSB19970は併存していたと判断されるが、柱筋は揃わない。SB19999の北方には2条の東西堀SA19943・19994が存在する。

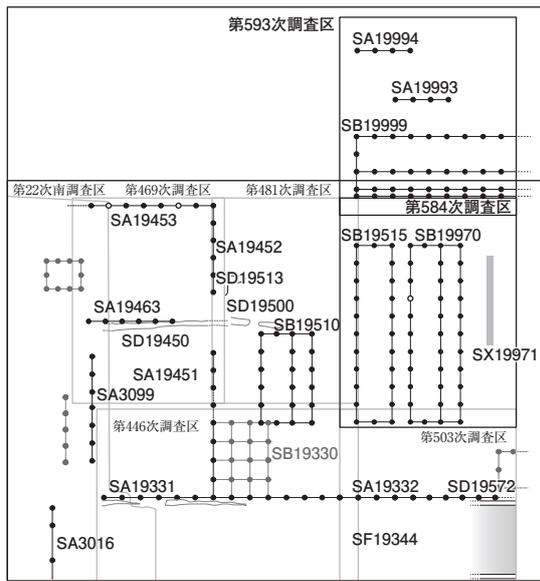
**2 期** 調査区南半に東西堀SA19516・19455が平行して造られたことで、空間構成が大きく変化する。これらの堀はさらに東の中枢部へ続いている。また、SA19516東寄りには、B期の南北堀SA19981が接続し、SA19516以北の空間を東西に分割する。調査区南部には、堀で区画された広い空間が存在するが、西南隅の小規模な総柱建物SB19525以外に建物は見当たらない。

**3 期** 調査区東南部に、溝SD19972・19973・19974をとともなう特殊な遺構が造られる。この遺構の東辺は、南方の壇状遺構SX19570の東辺とほぼ一致しているため、この壇状遺構に類する遺構が南北に並んでいた可能性が考えられる。なお、これらの遺構は、さらに南の回廊SC19112・19113に囲まれた、中枢部と推測される区画の北方外側に位置している。調査区北半では、この時期から5期までの段階でC期とした井戸SE20000とそこから派生する溝と建物が造営されたとみられるが、厳密な構築時期は特定できない。

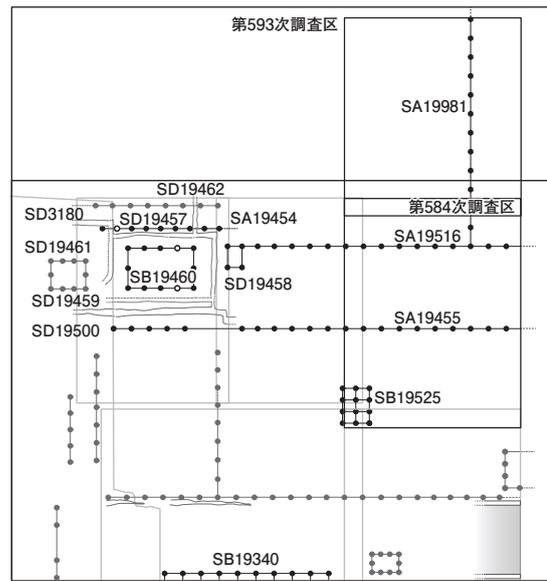
**4 期** 調査区東南辺では、南北堀SA19581が南方の東西堀SA19336との接続部から北に延び、調査区南半北部で東に曲がり、今回調査区からみて東側の空間を区画する。

一方、今回の調査区南半を含む南北堀SA19581の西側の空間には、東西堀SA19336を南限、南北堀SA19581を東限とする規格性の高い空間が形成される。内部には、南北棟建物SB19585と西方の南北棟建物SB19350を東西の両端として、両棟の北辺と南辺を結んだ長方形の範囲内に複数の建物が柱筋を揃えて建てられる。複数の建物が計画的に配置されるようになる。

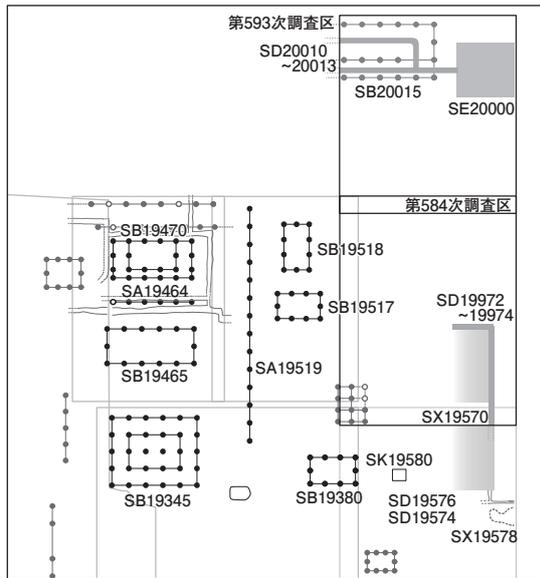
**5 期** 調査区南端に総柱建物SB19590が造られる。調査区北部北半では、SE20000と関連遺構がこの時期に確実に存在する。このほかに同時期の遺構はみつからず、調査区中央部では建物が希薄なことがわかった。



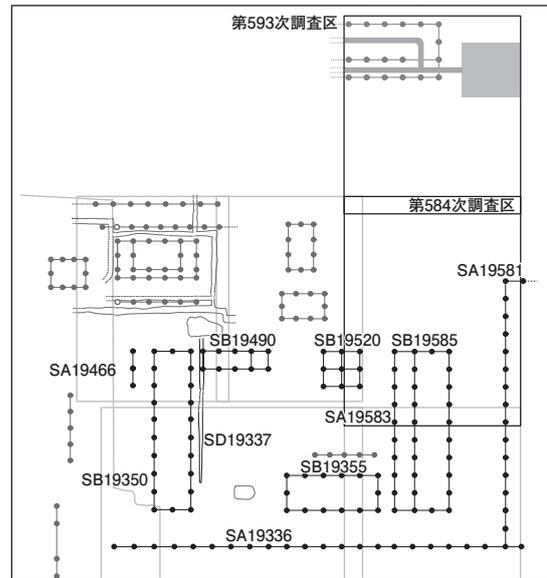
1期



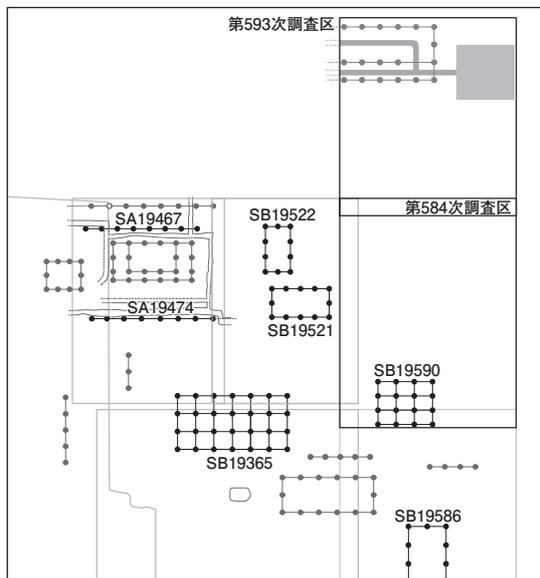
2期



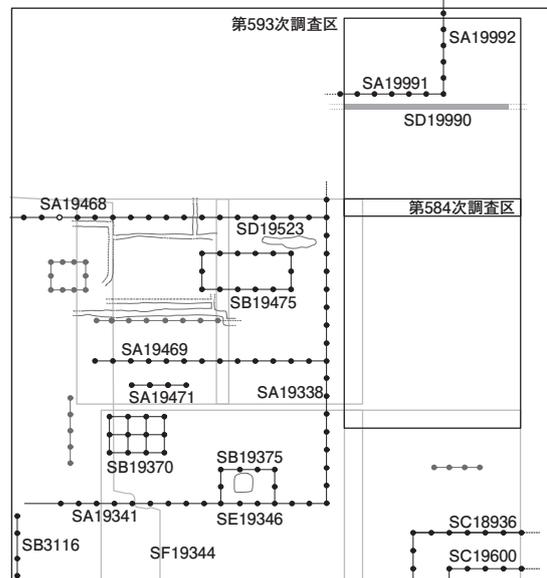
3期



4期



5期



6期

図217 遺構変遷図

**6 期** 今回の調査区南半では建物が認められない。調査区北半ではSE20000と関連遺構が廃絶しており、井戸枠や石組溝を抜き取った後に丁寧な整地が施されている。東西溝SD19990が掘られ、平行する東西堀SA19991とこれに接続する南北堀SA19992により区画を設けている。なお、SA19991は第481次調査区および第459次調査区で検出した東西堀SA19468から約14.6m北に位置しており、これは第446次調査区で検出した6期の東西通路SF19344とほぼ同規模である。東院6期中枢施設の西には掘立柱堀による南北160尺の区画が南北に整然と並ぶ様相があきらかになっているが、同様の区画が中枢施設の北方にも展開することが予想される。(小田・山藤)

## 6 小 結

第584次・593次調査で得られた主な成果は以下のとおりである。

**第584次調査** 第584次調査区では、西の第481次調査区および南の第503次調査区から続く掘立柱建物5棟と掘立柱堀3条の延長部分を検出し、建物の全体規模が確定した。このように、既往の調査で一部検出されていた建物と堀の全体規模が確定したことで、大型の南北堀と南の東西堀に区切られた中枢部より西側では、南北棟建物を東西に配する長方形の空間において、複数の建物が計画的に配置されていたことが判明した。

調査区西部から中心では、以前の調査でその一部がすでに確認されていた南北棟建物の東隣に、新たな南北棟建物を確認した。これらの建物は柱筋が揃っていることから同時期に並立していた可能性も考えられるが、確実な証拠は得ていない。なお、各建物を構成する柱穴の規模・平面形・深さが相互に異なり、また、東側の建物の柱のやり替えも確認されるなど、両建物の建築時期の時間差を肯定しうる証拠も認められた。

調査区東部の整地土上では、相互に隣接する3本の溝を検出した。これらは、特殊な遺構の存在を示唆している。これらの溝の東辺は南の第503次調査区で確認された3期の壇状遺構の東辺と位置がほぼ揃い、南北に連なる2つの特殊な遺構群の存在が考えられる。

これまでの調査により、東院地区西辺では総柱建物が多く検出されており、他方、本調査区の東側には回廊に囲まれた中枢部が広がっていたことが推測される。これ

に対して、本調査区が位置する、西辺と中枢部の間の空間では、奈良時代を通じて南北棟建物や小規模な建物が建てられる傾向があることがわかってきた。

なお、調査区の一部ではあるが堆積構造について検討することにより、これまで地山と認識されてきた整地土下の堆積土層(明黄褐色粘土)は、人為的な改変を受けた整地土であり、さらに平城宮廃絶後に地震動による液状化被害を受けていたことがあきらかとなった。今後は東院地区や周辺の分析データをさらに蓄積していくことで、堆積環境を面的に検討し、平城宮・京跡に関わる人為的な改変の様相をあきらかにする一助としていくことが望まれる。(山藤・村田)

**第593次調査** 奈良時代前半の大型の東西棟建物SB19999を検出した。東西9間以上の大型の南廂付き東西棟建物で、床張りの構造とみられる。柱筋の検討から、第584次調査区検出の南北棟建物SB19515と一連の空間を構成していたとみられる。建物は調査区外東方へ続いており、全体像の解明は今後の課題である。

また、奈良時代後半の大規模な井戸SE20000と関連遺構を検出した。SE20000は平城宮内では内裏地区で見ついている井戸に匹敵する規模である。SE20000からはSD20010~20013が派生し、覆屋SB20015を設けるなど、井戸の水を計画的に利用していた様子が見える。これらの遺構の状況と出土遺物の内容からみて、第593次調査区周辺は東院中枢部の厨に関連する空間であったと考えられる。(小田)

## 7 第587次調査

### 基本層序

調査区西半部では、黒褐色粘質土(攪乱土層)が25~30cm程度の厚さで堆積し、それを除去した黄白色粘質土(地山)の上面の標高約67.1mで、遺構を検出した。調査区東半部では、攪乱土層が地表下約1.1mまで堆積し、遺構は検出されなかった。

### 検出遺構

調査区西北隅において掘立柱建物1棟を検出した。

**掘立柱建物SB20021** 桁行2間以上、梁行2間以上の掘立柱建物。柱間寸法は約3.0m(10尺)等間である。柱穴掘方は南北0.7~1.0m、東西0.85~1.0mである。調査区北端にかかる柱穴の底面からは平らな石が検出され礎

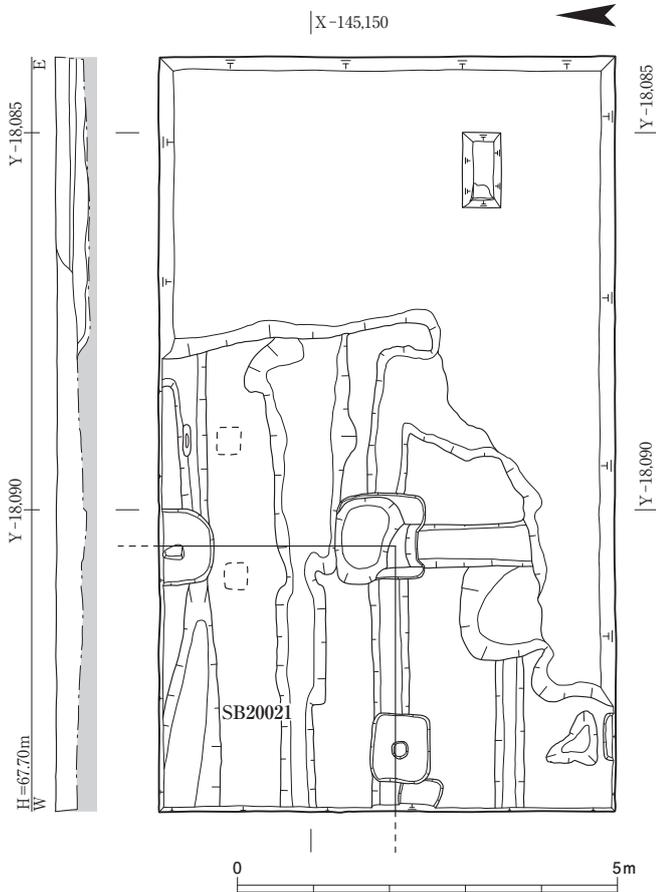


図218 第587次調査遺構図・北壁土層図 1:100

盤と考えられる。柱穴内とその周辺から時代を特定できる遺物は出土していないが、規模と構造等から奈良時代と推定される。

このほかに、2基の柱穴を検出した。調査区南にかかる柱穴はSB20021の柱穴から約3.0m (10尺) であるため、廂の柱穴の可能性もあるが、攪乱のため不明である。

#### 出土遺物

本調査区からは、土器類・瓦類の小片が少量のみ出土した。

#### まとめ

発掘調査事例が少なく、様相が不分明であった東院東辺において、古代と推定される掘立柱建物を1棟検出した。東院東辺の実態解明のために、今後も周辺の調査をすすめる必要がある。

(国武貞克)

#### 註

- 1) 「東院地区の調査-第401次」『紀要 2007』。
- 2) 「東院地区の調査-第421・423次」『紀要 2008』。
- 3) 「東院地区の調査-第503次」『紀要 2014』。



図219 第587次調査区全景 (北西から)

- 4) 前掲註2。
- 5) 「東院地区の調査-第292次・第293-10次」『年報 1999-III』。
- 6) 「東院地区の調査-第381次」『紀要 2006』。
- 7) 「東院地区の調査-第446・469次」『紀要 2011』。
- 8) 「東院地区の調査-第481次」『紀要 2012』。
- 9) 「平城宮跡・平城京跡の発掘調査」『年報 1991』。
- 10) 「左京二条二坊十一坪の調査-第279次」『年報 1997-III』。
- 11) 「第二次朝集殿院南門の調査-第326次」『紀要 2003』。
- 12) 「第一次大極殿院西樓の調査-第337次」『紀要 2003』。
- 13) 2棟の同規模建物が並び建つという、いわゆる「双堂」形式の建物が想起される(海野聡「双建築の再検討」『佛教藝術』320、2012)。しかし、今回調査区での南北棟建物SB19515・19970が接続していたという証拠は認められないため、「双堂」形式の建物とは現状では理解していない。
- 14) 岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981。
- 15) 巽淳一郎『記号・文字・印を刻した須恵器の集成』2000。
- 16) 『藤原概報15』。
- 17) 奈良県教育委員会『飛鳥京跡I』1971。
- 18) 『年報1998-II』。
- 19) 京都市埋蔵文化財研究所「平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』1997、西山良平氏・家原圭太氏のご教示による。